目次

精神教化と吾人の活動（時言）……本多日生
思想戰の意義（法幢）……本多日生
聖德太子の憲法に就て……本多日生
本經祖書要文講義……本多日生
日蓮聖人教義綱要……井村日成
宗門史料……山根青村
赤化の西伯利より歸りて……野口日主
改造運動と信仰……武田顯龍
佛陀と神明と……松尾鼓城
記事報道十數件

第廿五年二月號

第三百十號　明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可

伊勢國四日市市安樂寺建立淨財勸募之辭

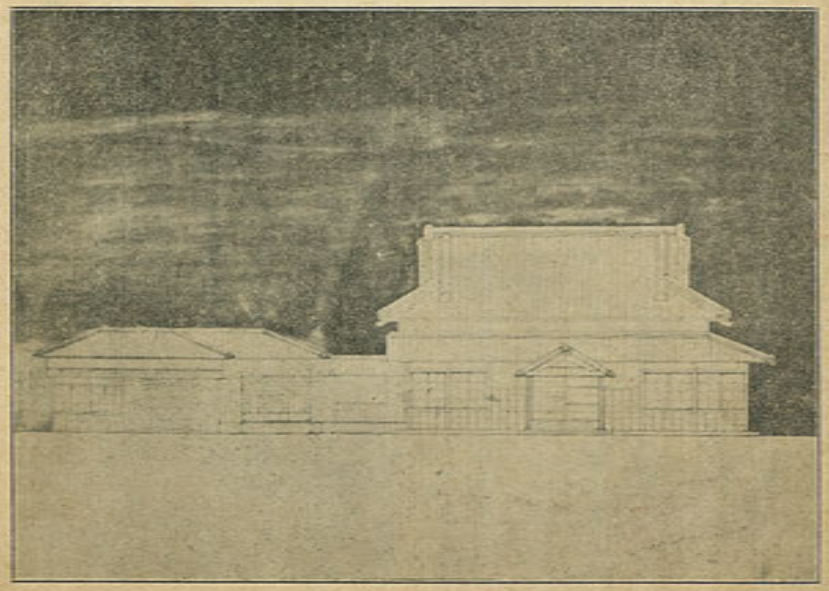
寺は精舍なり、人心を清淨ならしむること、米を精白にするが如く、又寺は功德林なり、この處に詣ずる者は功德を成就すること、園林に入つて華果を採收するが如く、復寺は金剛道場なり、この處に詣づる者は金剛不壞の佛身を成就す、經に云く、佛寺を建立する處は、其地皆金剛より成り、異減の變あること無しと、今玆に伊勢の國四日市市に於て、法華經の正義を尊重する信男信女等、心を協せて一寺を建立せんとす、幸に靜岡縣下に存する久模の安樂寺を移して、其寺號を襲用せんとす、安樂寺は醍醐法皇の建立にして由緒正しき梵刹なり、建立の計畫已に成つて將に造營に着手せんとす、希くば隨喜の諸氏この擧を贊助し、淨財を喜捨し、以て發願を成就せしめられんことを

維時大正九年九月

發願人　本多日生
國友日斌
山路元吉
兒玉小治良
佐藤柳
服部隆

寄附金勸募要項

一、敷地　金五千圓也　山路元吉寄附
一、本堂兼庫裡七拾坪　金壹萬圓也
一、工事完成　大正拾年貳月
一、寄附金は東京府品川町妙國寺、名古屋市新榮町宮德寺、又は四日市市新丁向山路方統一團分團宛申込及納付ありたし、



伊勢國四日市市安樂寺正面圖

時言

精神教化と吾人の活動

本多日生

本年は世界の平和克復の第二年に當りまして、兎にも角にも世界は平和の春風に向つて居る次第であります。我が日本に於きましてもいろ〳〵の問題は横はつて居りますけれども、大體に於ては經濟界に於ても非常なる進歩を遂げたのは事實であります。今日表面の不景氣といふは諸君の御承知の通りに、種々の事業の無謀なる擴大の爲に一時挫折を致しましたけれども、國家の富の力といふものは非常なる進歩を致して居るのでありまして、大藏省の貯金局長の說明する所に依りますれば、我國の貯金率の增加の如きは近年非常な成績であつて、最初明治八年に貯金を奬勵してより以後、三十一年の長き歲月を經て漸くに一

億萬圓に達した我國が、昨年は不景氣といひながら前半期に於て六ヶ月の間に一億圓以上の貯金が出來て居るといふやうな譯で、財界の表面の狀況はいろ〳〵虛々實々面倒な事でありませうが、我國の經濟力といふものは非常なる進歩を爲して居ることは明かなる事實であります。この點に於ては我國が國の天職を果す一つの要素として寔に私は慶ばしい事であると思ふのであります。いま一つは思想の方面でありますが、是も或る一部に於ては段々に思想が惡化して居るやうにも考へるのでありますけれども、大體の國民一般から申しますれば、思想の事に就ては一つの新しき覺醒を懷くやうになつて、ウカ〳〵して居つてはならない、國家的意識に於ても一般進んで參りまして、どうか日本の國の榮えて行くやうに考へなければならない、又人心の墮落といふことも今日の儘にして唯だ利己心にのみ流れて行つたならば、終に社會國家を危ふするものであらうといふやうな考は、多少の心ある人に於ては孰れも懷くやうになつて參つたと思ふのであります、即ち禍ひを轉じて幸ひとするといふ事が玆に爲し得られるかと存ずるのであります。表面は非常に思想の惡化、思想の墮落といふ事に就て憂ふべき現象も見えますけれども、それに驚いて國民の大多數が健實なる覺醒を起すに至りますれば、所謂雨降つて地固まると申しますか、禍ひを轉じて幸ひとするといふ、日蓮主義の大活眼に合するやうなことに國民が相成つて參るのではなからうかと思ふのであります。故に先づ我國の現狀に於ては左程に悲觀する必要はないかと思ふのであります。

殊に我國の種々なる施設、就中人心を教化する方の施設に當つて居ります、所謂文部省の側の觀念といふものが、近來には餘程覺醒めて來られたやうに考へるのであります。從來は學校教育の中に閉ぢ籠つて、さうして一種の型に依つて國民の教育をやつて行かうとする、而もその型が少し窮屈な意味になつて居りました爲に、分析をして申しますれば日本の教育は餘程强い物質主義に傾いて居ります、高遠なる精神生活といふやうな事は文部省の當局に於ても、それは迂遠な事である、不必要な事であるといふやうな考があつて、隨つて宗教の事などは國民を指導する上に於いて大した關係のあるものでないといふお考であつたかと存ずるのであります。その文教の府が唯物的なる觀念に落込んで居つたといふことは、是は非常な國家の禍ひであつたのであります。その文教の府が唯物的なる觀念に落込んで居つたといふことは、是は非常な國家の禍ひであつたのでありまして、迚も泥棒や人殺しが飛出した位のものではない、一國の文教を支配する所の頭腦が、人間の精神生活を要求しないといふやうな、所謂低級なる觀念に依つて國民を教育して行くといふことであつたならば、その落着く所は知るべきのみなのでありまして、一番恐るべきものは、文部省の固陋なる觀念であつたではなからうかと私は思ふのであります。それが近來非常な覺醒に向はれたやうに思ふので、まだ保證は出來ませぬけれども、私はそこに覺醒められつゝあるのではなからうかと存ずるのであります。その證據は文部省の內部に社會教育の研究會が出來まして、この社會の民衆を精神的に教化しない限りに於ては學校の教育は效果を擧ぐることは出來ない、學校の門の內に閉籠つて、學校の窓から世の中を眺めて居るやうでは駄目である、どうしても學校の門の外の空氣と學校の內部とが疏通して、學校で造つた人間が活きた社會に出て用を足すやうにして行かなければならぬといふ所からして、

『社會と教化』といふ雜誌を文部省の内部から發行するやうになつて參りました。教育といひ教化といふ事は吾々の間に於ては早くから考へて居りましたし、始終申して居るので、殊に盛んに社會教化とか民衆教化といふ字を使ふやうになつたのは、内務省の民力涵養運動の計畫の最初に於て、これは教化を主としたる事でなければならぬといふことで、吾々も多少そこには力を盡したのでありますが、國民教化とか民衆教化とかいふ事をその當時から力説して居りました。私の出版して居る書物の中にも『國民教化』と題して居る書物もありますが、この教化といふ事を盛んに言ふやうになつて行かなければならぬ。教育といふと、それは社會教育とか公民教育とかいへば廣い事ではあるけれども、何となく學校の黑板の前で窮屈な型の話ばかりをするやうに聞えるのであつて、活きた社會に活動して居る國民全體、活社會に活躍して居る國民の精神を健全に指導する所の大運動といふものが、從來文教の府に於ては忘れられて居るやうに思つたのであります。所が今日は『社會と教化』といふ雜誌を發行するように相成つて、社會を教化して行くに就いてはどういふ事が一番必要でありませうかといふことを、吾々の方にも尋ねて來られるやうな事に相成りました、これは文部省の大自覺であらうと思ふ。それがどれだけの結果を齎し來るかは未知數でありますけれども、先づ以て此の文教の府が民心の教化を忘れて居るやうな事では、如何に他の方面に叫んでも容易にその功を擧げ難いことでありますが、兎に角日本の教育を支配して居る所の文部省が、社會と教化といふことを重く考へるに至つて、爰に非常に日本の思想界が影響を受けるであらうと思ふのであります。

又内務省に於て實行し來つた民力涵養の事柄も二つの目的がありまして、一つは生活の安固を期すること、一つは思想の健全を期することといふので、即ち生活上の問題と思想上の問題の二つに向つて運動を開始したのでありますが、吾々は生活の事は無論大事であるけれども、今日の大切なる問題は思想の事である、能く世間では衣食足つて後禮節を知るのであるから、思想の事などを先に言つても仕方がない、先づ食へるやうにしてやつてからでなければ思想の問題を語つても駄目ぢやといふ事を申します、大多數の政治家も左樣な頭腦であつたし、新聞の論調も始終左樣な事を言つて、精神教化を熱心に説く者を嘲けるやうな句調が往々にして世に發表せられて居つたのである。さうして今日力强く騷いて居る所の勞働問題といひ、或は普通選擧といひ、すべて彼等の騷ぐ原動力といふものは、生活の問題を基礎にして彼れ此れやつて居るのである、人として國民として、將た此の偉大なる天地の内に生れた所の絶對の一人としての高き精神の生活といふものを忘れて居るやうな暗愚な者が、國家に充ち滿ちて居つたのである、それは如何にも憫れなる狀態であつた。それ故にこの民力涵養の目的が二つあるにしても、生活の問題は第二位に屬すべきものであつて、精神教化が本位である、精神教化を第一に置かなければならぬといふ事を吾々は力説し來つたのであります。本年一月の『統一』誌上にも、唯今申すと同じ事をズッと前に民力涵養の會合の席に於て主張した事があつて、その事が出て居るやうでありますが、又最近舊臘十二月二十三日の民力涵養

の會合の場合にもその問題が起りまして、種々生活の方面の事と思想の方面の事に就て話が出ましたが、最早や十二月二十三日の會合の席では、一人も生活問題の方が重いと言ふ者はなくなりました。どうしても萬事萬端の問題は思想の側からして行かなければならぬ、思想の側から行くには不健全なる思想を撃退しなければいかぬ、それには受身であつてはいかぬ、どうしても是れは攻撃的態度でなければならぬ、日蓮主義的態度でなければならぬといふやうな事柄が、いろ〳〵の方面から叫ばれたやうな次第であります。それ故に末々の役人に於きましては、今なほその點を意識しない者もあるかは存じません、或は地方長官の中には未だやはり生活の方の問題が大事で、思想の事などは程よくやつて置けば宜いといふ位な不徹底な頭腦の地方官も少しはあるかも知れませぬけれども、兎に角中央政府に於ては、是はどうしても精神の問題を重きに置かなければならぬといふ事を自覺せられたのが事實であります。

又勞資協調の方面に就ては、やはりその會合の場合に勞資協調會から添田田澤永井の三理事とも出席せられて居りましたが、添田理事から代表意見として協調會の方針を語られました所に依れば、過般來東京大阪、神戸等に於て勞働團體の代表者に會見をして彼等の言ふ所を一々聽いて意見の交換をやつて見たが、併し吾々の得た結論は外ではない、すべて彼等は中々極端なる事を言うて居るけれども、その思想の根據は全く唯物的の思想の禍ひであるといふ事を確認し得た、又資本家が自覺が足らぬといふのも、その自覺が足らぬといふ事は何かといへば、彼等が唯物的の觀念に陷つて、精神生活の味ひを知つた資本家が少いといふ事である、勞働者が自覺が足らぬといふ事も、彼等は唯だ目前の賃銀の問題などに依つて幸福を爭つて居つて、人間には高き精神の生活を得なければならぬといふ自覺が足らぬのであるから、この勞資協調の運動はストライキが起つてから仲裁するといふ事は抑々末である、左樣な衝突の起らぬやうに根本の運動をするには、資本家に對しても勞働者に對しても、彼等に唯物的觀念の誤謬を覺らしめて、人間には精神的生活の方面を開拓せぬ限りには決して幸福はないといふ自覺を促す運動、それが勞資協調運動の第一義であるといふ事を吾々は決定し得たといふ事を、添田理事よりして勞資協調會を代表して明言せられて居つたのである。是も非常な進歩と申しますか、吾々の思想、吾々の觀念に接近して來られた事を認めるのであります。以前の勞資協調會の態度は諸君の御承知の通りに、やはり西洋の經濟學の方面からして勞働問題の成行きを調べて、調査々々といふことに日を暮して、長い間手も足も出さずにぼんやりして居つたのが協調會の狀態であつた。それが唯今申すやうに勞資協調の問題も資本家及び勞働者に對して相互に精神生活の價値を認めしむるより外ないものであるといふに至つては、是れは實に日本の勞資協調會の一進歩と開ふべきであつて、吾曹精神上の叫びを擧げて居つた者の非常に悅びに堪へぬ所であります。

又陸軍の方面などに就ても非常にこの思想の事を重んぜられて居るので、過般も上原參謀總長の意見としていろ〳〵話されて居りましたが、どうしても軍隊は今や精神の問題に於て十分の注意を拂はなければならぬといふ事である、今の所大した事はないけれども、隊さへあれば軍隊の精神を動搖せしめようとし

て、現に過般の如きも種々なる不穏の文書をば各聯隊へ送つた者がある、それは日本中殘らず送つて居るのでありまして、その文章は餘り碌な事は書いてない、價値ないものださうてありますけれども、兎に角軍隊に向つて一種の危險なる思想を宣傳しようとしてやつて居るので、全然冗談事ではないのであります。それも二本や三本ではない、各中隊に對して悉く送つて居るさうてありまして、是れが大いに警戒を要することだと言つて居られました。

その他朝鮮の方の動亂の問題に對しましても、表面の統治——所謂法律であるとか警察であるとかいふ事に依つての統治のみでは、永久に朝鮮人をしてこの日本に融和せしむることは不可能でありはせぬか。此の事に就いても現齋藤總督は丁度私想意でもありましたし、不思議に先般九州から歸る時分に下關からズッと一緒でありましたから、いろ〳〵話し合ひましたが、どうしても是れは自分の考としては、前の總督はどういふ考であつたか知れませんけれども、表面は表面で法律なり規則なりそれ〴〵の力を以つて統治をして行かんければならぬ、けれども、唯だそれだけで事足りると思つたならば大變な間違ひで、どうしても精神の方面からして彼等を開拓しなければならぬものであることを深く感ずる、といふ事を申して居られました。さうしてどうか日蓮主義の人々も朝鮮に渡つて、その教化の事に從事して貰ひたいといふやうな話もありましたが、左樣にして凡ゆる方面が精神の問題を重く視る、殊に一般の民衆、それを精神的に教化する運動でなければいけない、それをやらなければ學校教育だけでもいけない、軍隊の形ばかり發達してもいけない、勞資協調の問題もいけない、民力涵養もいけないといふ事になつて、凡ての方面が實際の精神的教化を重んずる自覺に進んで參つたといふことは、實に大きな事實であらうと思ふのであります。それは最近の事柄であるから、田舍の末々まではその觀念は及んで居るまいけれども、中央の內閣の人達がさういふ自覺を起しますれば、次第にそれは府縣より郡市町村に及んで參ることゝ思ふのであります。寔にこの精神生活を貴び、精神教化を重んずるといふ事をそれ〴〵の人が自覺せらるゝに至つたといふことは、大いに祝福すべき事であらうと思ふのであります。

恰度左樣に世の中が精神の問題に向つて來た時に、吾々日蓮主義者は本年日蓮聖人の聖誕七百年を迎へて、この年を期として一大飛躍をやらうといふことは、期せずして各教團の中に漲つて居る所の大精神であらうと思ふのであります。他の教團に於て如何なる事を爲されるか、一々調べても居りませぬけれども、必ずやそれ〴〵の御計畫のある事と思ひます、隨つて全國到る處に本年は聖誕七百年の紀念運動として、日蓮主義の發揚が圖られることゝ思うのであります。一面恰度國家が精神教化の自覺を起したる時に、聖誕七百年に遭遇して日蓮主義者が大活躍を決心して居るといふことは、實際本年に於ける吾々の悅びとしては一番大きな事であらうと思ふ、國家の方面がその自覺がある時に、日蓮主義者の飛躍をすべき年に遭遇つたといふことは、法の上から考へても國の上から考へても、是ほど私は愉快な年はないと思ふのであります。而して此の事を今日慶ぶが如くに結果を有效ならしむるや否やは、全く吾々日蓮主義者の僧俗の努

力如何に關することであつて、その働き振り如何がその結果を左右する次第であります。こと故に、吾々諸君と共に本年は一層日蓮主義の宣傳に努力致したいと考へるのであります。唯私はそういう場合にお祭り騒ぎに等しいやうな一時的の事を行うてワイ〳〵するといふことは、時代後れであり、價値なき運動であると考へるのでありまして、どうか實質的に國民一々の精神の中に健全なる思想を打込んで、そこに法華經の意義なり、健全なる思想の觀念が國民の間に普及するような運動を盛んに起したいと思つて居るのであります。

尚ほ本年は聖德太子の千三百年忌に相當するのでありまして、この方に就ては種々計畫もありまして、大分多額の費用も集まつて居ります、宮内省の方からも先般御下賜金が六萬圓ありまして、この大正十年を期して聖德太子の偉德を大いに稱揚しようということになつて居ります。日本に最初佛教を非常に熾んにして下さつた聖德太子は、明治維新の時に大變ケチを附けて、追込んだやうな事になつて居つたのでありますが、それと同時に日本の精神界が根據を喪ぶやうになつて參つた。聖德太子は唯だ一人の聖德太子ではない、國民が聖德太子を蔑ろにし、聖德太子を押籠める時、日本の精神生活といふものは濁れて來るのである。でありますから聖德太子を慶讃し、聖德太子を追懷するといふことは、必ずやそこに國民が精神生活の重んずべきことを自覺するに至るので、非常に聖德太子は偉大なる影響を國民に有つてお居でになるのであります、殆ど日本の高き文化は聖德太子に依つて開かれ、明治維新に來るまでの日本國民の根本精神といふものは、聖德太子に依つて指導せられたと申して宜い位であります。それ故にその聖德太子の千三百年祭に遭遇して茲に大運動を起すといふそれ〳〵の人々の決心があつて、もう早や數年前から計畫されて居りましたので、本年の櫻咲く頃になりますれば、各所に聖德太子慶讃の運動も起りまして、日蓮聖人聖誕の紀念運動と相俟ちまして、佛教の氣勢を揚げる次第であらうと思ふのであります。本年は洵にこの意味に於て愉快なる年であらうと存じます。

殊に直接の喜悦として考へまするのは、統一團の關係する僧俗――僧侶の方に於きましても一段熱心の度を加へて參つたやうに思ふのでありますが、著しく顯はれて居りますのは信者の方に於ては段々信仰も深くなつて參り、力も強くなつて參り、數も殖えて參りまして、昨年の一年に於て統一團の運動が餘程の效果を擧げ得たと思ふのであります。東京に於ける中央の成績も相當に擧つて參りましたと思ひますが、その他に地方に於て統一團支部といふものが段々に出來まして、名古屋支部、京都支部、大阪支部、神戸支部、その他四日市、一宮、まだ數へますれば五六ヶ所ありますが、丁度昨年に於いて約十ヶ所ばかりの統一團支部といふものが出來て居ります。その支部が本部よりも盛大なる程な勢ひを示して居るのでありまして、名古屋、神戸などの成績は一ヶ年の運動ではありますけれども、非常なる效果を擧げて居るのであります。神戸の會合なども千四五百人の人が集まる位であります、前に會場にして居りました五六百人しか入らない所の會場では用を爲さなくなりまして、それ以上の二千人も入るやうな大きな會場に於てこの頃は會

を開いて居るのであります、今の神戸の會衆でありますれば、統一閣のこの會場では迚も入らないのであります。それ程に神戸は成績を擧げて居りまして、さうして宣傳部員といふ者を約三十人ばかり任命して、男女孰れもこの主義宣傳の爲に路傍演說もやり、廣告貼りもやる、相當なる學校の教員なども加はつて、非常なる時代的活動をやつて居ります。それは皆この統一團支部の運動でありますが、この點に於て私は統一團なるものは、過去數年の發展よりも昨大正九年の發展が餘程大であつたと思ひます。先刻申した大藏省の役人の言うて居りました日本の貯金は、三十一年かかつて一億萬圓しか出來なかつたのが、昨年は六ヶ月で一億萬圓出來るやうになつたといふ事でありますが、統一團の發展はそれと比例したる程のものになつて行くのではなからうか、必ずや大正十年に於ての統一團の運動は餘程めざましいものであり、效果を擧げるものであるといふことを私は豫想するのでありまして、大正十一年の初頭に於て諸君が御記憶になつて居つて、大正十年には相當の效果を擧げると言つたが、どれだけのものを擧げ得たかとお尋ね下さるならば、私は確に相當なる效果を事實を以て御答を申上げようと決心をして居るのであります。

《了》

法幢

思想戰の意義（其二）

本多日生

目次

一、學究先生の痴鈍…二、思想上の不明は古今の通弊…三、釋尊の卓越せる所以…四、人間の煩惱と危險思想…五、信根の養成…六、念根の養成…七、精進根の養成…八、定根の養成…九、慧根の養成

一、學究先生の痴鈍

未だ〳〵さう云ふ點でも十分の見解が定らないで、やはり思想の自由、言論の自由と云ふ事に力を入れる人が多い。それは無論正しい意味の事を言ふのを壓迫するならば、言論の自由を叫ぶのも有理であるけれども、國家を破壞する樣な、又今のバルチザンの樣な慘虐な事を導き出すのを、自由の名に於て宣傳し

やうナンといふ事は自由の惡用である、これは左樣に細かい研究をしないからと言つても、左樣な思想が害毒を流しつゝあるのは明白な事であります。往々學者であるとか思想家であるとかいふ者は、屁理窟に囚はれて居つて、十分に吟味して全部の事情が分らんければ、その事が善いとも惡いとも言へぬといふ事を言ふが、病氣に譬へて見たならば、モウ飯が食へなくなつて死にかけて居る、併し病氣の性質が分らんから病氣があるとも無いとも言へないといふ樣な譯である、も早や呼吸が絶えかけて居るけれども、何の病氣か分らぬから、この人は病氣があるといふ事も言へない、藥も盛らない、死んでは行くけれども病氣は分らぬといふ樣な事である。世界が斯の如く惡化しつゝあつても、何故にこれが惡いかといふ事が分らぬ、過激派が何故に惡いか、僕は研究しないから分らん、君等は素人であるから一概に惡いといふけれども、惡くないかも分らぬぢやないか、こんな事をいふのである。さういふ事は大變眞理に忠實なるが如くであるけれども、私は物事は大體に於て達觀すれば宜いと思ふのである。一々細かい事を研究せぬても、さういふ思想が惡いといふ事は常識を以ても判斷される事である。病氣の原因が何處であるかといふ事が分らんでも、長く寐込んで居るとか、飯も食へぬ、元氣も無くなると言へば、病源が分らないと言つてもこれは確かに病氣である、放つて置いたら大變だといふ事は素人でも分る話である。これを「イヤ、これは病源が分らんから病氣で無いかも知れぬ」と云ふ樣な事をいふのが現代の學餘である、それが學者の病弊である、今日思想の惡化しつゝある事は、大して學問しなくとも分ることであり、一々講釋を聽く迄も無い事ぢやないか、それを一々學理を研究しなければ惡化して居るのが分らぬナンと言うて居るのは實に暗愚な人達であると私は思ふ。

二、思想上の不明は古今の通弊

大體この思想を重んずる重んぜぬといふ問題は、人類三千年四千年を通じての大問題であつて、何時でも一般の政治家、一般の人間は思想を輕んずるものだといふ事が言ひ得られると思ふのであります。思想が重い〳〵といふ事を口にする人も、眞に思想が重い事を知らぬのではないか。嘗ては日蓮聖人が『立正安國論』を作つて時の執權を諫め、又國民に對しても警告を發せられたが、併しそれに共鳴する者は割合に少ない、今日に至つても日蓮主義が勃興するとはいふものゝ、未だ〳〵日蓮聖人の思想の眞意に對して理解を持つ者は少ないのである、人間といふものは割に暗愚なものであるといふ事が言へると思ふ、分りきつて居る事柄に就て判斷もせずして、何時までも迷つて居る、非常に明白な、日蓮聖人の言葉を借りて言へば、「星と日とどつちが明るいか」と云ふやうな事でも、「一寸待つて呉れ、歸つて女房に相談して見る、星の方が明るいかも知れん、一寸見た所ではお日樣の方が明るいやうに見えるが、併し輕卒には言へませぬから」……、翌日になつて「どうだ、お星樣の方が明るいか、お日樣の方が明るいか」「どうも今日の所ではお日樣の方が明るいやうですが、もう少し試驗して見ないと分りません」……中々念入りである、容易に決定を與へない、五年經つても十年經つても星の光と日の光とどつちが明るいかが分らぬ、「一年や二

年でお日様の方が明るいなんと云ふのは獨斷だ、愼重な態度を取らなければならぬ」……そんなに云ふのは實に暗愚な事ではないかと日蓮聖人が言つて居らるる。分りきつて居る所の事柄を判斷せずして、何時までも迷うて行く事は、人類古今の通弊であらうと思ふ。思想といふものは割合に進歩しない、割合に取捨が明らかにならぬ、例へば今日他の問題に就て考へて見ても、或は佛教なら佛教、神道なら神道に於て行はれる迷信がある、是等は少し教育があり、考へのある人から見たならば、詰らぬ事だと思ふけれども、併ながら滔々として數百萬の信徒が出來る。その開山は豆腐屋の婆アとか紙屑買ひの婆アであるが、それに何十萬何百萬といふ信徒が集まる、經典も何も無い、「一列濟まして甘露臺コリヤ〳〵」といふやうなものである。或は穴守の稻荷などでも、特別に電車が敷けて居る、穴を守るといふのは何だ、名前を聞いただけでも馬鹿臭くて頭などが下げられはせぬぢやないか、それを態々電車を敷いて、行く者が一パイあると云ふ。あれが出來る時分には私の寺の附屬教會として呉れと言つてやつて來たが、そんな馬鹿な事が出來るかと言つて斷つてやつた、さうするといろ〳〵やつて神道の方の好い加減な者と引ついて穴守稻荷ナンと云ふ名前を附けてやり出した、それに東京の人などがゾロ〳〵行つて居る、あそこに瓦斯燈のついて居るのを見て御覽なさい、それは澤山並んで居る。左樣なもので洵に分りきつた事にも迷うのであるから、油斷も隙もならぬのが人間である。それは迷信について言ふのだけれども、東京市が市民の思想を善導するに就て、どれだけの金と、どれだけの人と、方法とを取つて居るかと云ふ事を研究して御覽ななさい、或は村なら村に就て見たならば、その村會議員なり村長なりが人心のこの危險化する場合、人心善導の爲めに取るべき方法として如何なる事を研究し、如何なる費用を投じ、如何なる實行方法を採つて居るかといふ事を考へて御覽なさい、實にどうも寒心に堪へぬのであります。或は實業家が寄つていろ〳〵な事をやつて居るが國民の思想の惡化に對して之を防止し若くは撃退し、健全なる思想を發揚すると云ふ實行に當るべき、何處に運動が起つて居るのであるか、さつぱりさう云ふものが無いではないか。東京なら東京の演說會では、吾々の知らぬ人が演說會をやつて居る事はない、どこそこに演說會がある、あゝあれもあの人か、あれもこの人か、皆五人か七人があつちに行き、こつちに行つてやつて居る、出て來る講師は皆同じ人である、やらぬ者は些つともやらぬ。さうしてその思想の演說會に、相當の富豪といふやうな人が、一人だつて傍聽の席に來て居つた事があるか。彼等は何をして居るのであるか、一つ間違つたならば、今日の富豪は石を打つけられたり、棒で頭を打破られたりしするのではないか、之を善導しなかつたならば、他日彼等の頭が打破れると云ふ事は、モウ今日に見えて居る事である。頭を破られかけてから「待つて呉れ三十萬圓寄附をする」「百萬圓寄附をする」と言つて周章てるが、それ程人間といふ者は暗愚な者である。左樣な事になつて火を放けられてから、五十萬圓出す百萬圓出すと言つてバタ〳〵する、見つとも無い事ぢやないか、寧ろ男らしく撲られてしまつた方が宜いではないか。

左樣にして私は實業家でも政治家でも、一般國民でも、眞に思想を重んずる人は、洵に少ない事を感ず

るのである　故に日蓮聖人が警告を與へられたその意味合ひは、今もその儘活きて居るのである、上は當治家に對し、どうしても日本の國を良くするには、立正安國の精神に依つて、正しき法を立てゝ國民の思想を陶冶し、さうして國力を培養しなければならないと言はれた事は、今日の政治家の頭上に下つて居る所の大警告であります。この思想の戰ひの盛んなる時には、先づ日本の政治家は日蓮聖人の立正安國論の趣意をよく咀嚼して、大いに思想を重んずる事に眼覺めなければなるまい。マア今の内務大臣などは、その點に於て比較的よく考へられて居るやうであるけれども、内閣全體として若くは政友會として見渡した時に於ては、未だ〳〵どうも思想を重んずる者と云ふ事は出來まいと思ふ。

三、釋尊の卓越せる所以

釋迦如來は帝王の王子と生れて、迦毘羅衛域の主權者であつた、實に迦毘羅衛の王は立派な系統でもあり、又榮えつゝある所の有望なる帝室であつたが、釋迦如來はその榮冠を捨て佛にお成りなさつたのである。此の事は政治家であるとか、實業家であるとか、國王であるとかいふ人達は、釋迦は何故に左樣な地位を擲つて菩提を成就して、一代八十年間精神的なる活動をしたものかと云ふ事を、深く深く考へて見なければならぬと思ふ。今迄は釋迦は厭世の爲に世を悲觀して山に這入つたものだといふやうな事を言つてこの千古の偉人を迎へるに己れの低さ考から喝つて居つたけれども、それは實に申譯も無い事であつたと思ふ。全體人間といふ者は、何時の時代でも思想を輕んじ過ぎるから、印度に於ても澤山の權力者が現れて政治を執り、又實業家もあつて、當時は長者々々と言つて、金持が澤山居つた、けれども人間は思想の側から之を善導しなければ、所謂社會も破壞されてしまひ、人間の幸福も奪はれてしまつて、生きながら三惡道と云つて來ると云ふ事を看破して、釋尊は決然起たれた譯である、それは婆羅門の教などはあつたけれども、皆下らない行に這入つてしまつて、自分一人が身體を苦しめて、寒中水を浴るとか、手香を盛るとか云ふやうな事ばかりやつて居た、そんな事は何もならん、自分の身體を弱らせるだけの話である、教を以て人心を善導するのではない、手の上に香を盛つて、熱いけれども辛抱して居れとか、そんな事を善いと思ふのは暗愚な話である、頭をむやみに刺戟したならば、立つて天下の大事をなさうとする時分に頭が痛いて何も出來はせぬ、詰らぬ事ぢやないか。それ故に釋迦如來は、左樣な宗教は詰らぬものだとお考へになり、又一面世の單に金錢に生き、權力にのみ生くる人達を憫んで、この誤れる宗教、誤れる政治、誤れる俗界の人達に對して、偉大なる教を說くべく、神聖なる精神文明の開拓者として立たれたのである。その時に釋迦如來は思想の重んずべき事を嚴然として我等一切衆生にお告げなさつた。それはいろ〳〵の側から立證することが出來ますけれども、釋迦如來は自分が王樣で、どんな善い政治でも取らうと思へば取れるけれども、政治の上に於て如何に善い政治を取つても、それは形の方から及んで行くのであつて、人の心を善くするには政治では力が足らない。政治は惡い事をした者を縛つて牢に入れる事は出來る、けれども心に考へて居る事をどうする事も出來ない、而して行爲は心に成つて而して後に動くので

ある、泥棒しやうかしまいかと考へて居る時に、してはいかぬと云ふ教を持つて行かなければ、泥棒をしてしまつた奴を取捕へて見ても、最早や仕方がない、親を殺さうか殺すまいかと考へて居る時に之を善導しなければ、殺して終つた奴を取捕へて死刑に處して見た所が、殺された親は生きかへりはせぬ。凡て政治は手後れの事が多い、消極的の事が多い、そこで釋迦如來はどうしてもこの王位を擲つて、人を精神の上から善導すべく決意せられた。然らざれば「四惡道增長し、阿修羅も亦盛んなり」と法華經に說かれた地獄、餓鬼、畜生といふ三惡道、貪慾、瞋恚、愚痴の煩惱の爲めに人生が混濁になる、阿修羅といふ戰ひの煩惱もこれに加はつて、人生にはあらずして地獄、餓鬼、畜生、修羅の巷と化すると言はれたが、實にその通りであつて、先般のニコライエフスクの事などは、全く三惡道增長し阿修羅も亦盛なりといふ經文の通りになつて居るのであります。又法華經に說いてあるが、釋迦如來が敎を立てられない場合に於ては一切の人は毒を飲んで地に宛轉して居る、子供が毒に中てられてのたくり轉つて苦んで居る、そこに父の名醫が歸來つて、その子供を助けやうとした所が、子供は非常に喜んで、毒に中てられては居るけれども未だ本心を失はぬ者もあつて、どうぞ救つて戴きたいと願つた。そこで良き藥を與へて之を助けたと說いてある。この毒に中てられて居ると云ひ、良き藥を與へたと云ふは思想の惡化善化を言うのであります。

四、人間の煩惱と危險思想

そこでその毒藥とは極端なる所は破壞的の思想であるけれども、それに行くべき順序としては、瞋恚、貪慾、愚癡、鬪爭といふやうな煩惱を戒めねばならぬ、人々に煩惱が盛んであれば、どれ程思想の戰ひを喧ましく言つても、惡い方に負けてしまはなければならぬ。どんなに消防夫が出ても、家が柿葺であつて且つそれに旱天がつづいて、一寸火が飛んだら燃えるやうになつて居れば、中々火を消す事は出來ないのである。所が人間の心に瞋恚、貪慾、愚痴、鬪爭が盛んになつて居るのは、柿葺の家が旱天に依つて燒け易くなつて居ると一般、惡い思想の方に墮ちて行くのである。支那に過激思想が蔓延するのも、又亞米利加が動搖するのも、英吉利が動搖するのも同じ事である、日本がその影響を受くる受けぬといふは國民の精神に於て煩惱心が盛んか否かといふ事から判斷しなければならぬ。如何に學問をして、惡い思想はいかんと言つても、己れが瞋恚、愚痴、貪慾に囚はれて居れば、直ぐに惡い方に走つて行くのである。

五、信根の養成

故に釋迦如來は先づ人の心を淨くし、この煩惱を擊退し、これに代るべき善き精神を起さしめ、所謂「信根」といふ信心の芽生を盛んにして、鞏固なる信念を以て、偉大なる眞理に依り、モウ何者が來ても動かぬ、といふ正しき根據を打立てゝ置いたならば、惡い思想が來ても感染し無いのである。法華經を手に握つて南無妙法蓮華經と唱へて、假令頸を斬らるゝことがあらうとも、法華經と共に討死すると決心して居る者の爲には、如何なる思想が來ても動きはしない、此方の心が空つぽてふら〳〵して、肝癪玉や慾張根性や、喧嘩腰みたやうなものばかりになつて居るから騙されて行くのである。信念を持たぬ國民であ

つては、政治上經濟上の知識があつても、結局は惡いもの丶爲めにやられるのである。中々惡い思想といふものは執念深いので、鳥が池の緣に來て泥鰌を食はうとして居るやうなものである、曉方などに池の緣の石の上に五位鷺がやつて來て、音もしない呼吸もしないでヂッとして居る、そこに一寸鮒なり泥鰌が浮上つて來るとパクッと食つてしまふ、惡い奴の方がどうしても執念深い、泥棒などは椽の下にヂッとして、それも一と晩ぐらゐではない、三日でも四日でも飯も食はずに樣子を窺つて居る、その中に親父が留守になつた、女房が出かけたといふやうな時を見て、椽の下から出て便所の窓から潛つて這入ると言ふやうな事になる。善い事をするのに、例へば先生の所に本を習ひに行くといふのに、椽の下に三日も潛つて居つて、先生が歸つて來たら本を習はうと云ふやうな熱心家は無い、人間惡い方にかけたならば中々熱心なものである。或る意味に於て人間は煩惱の方が優勢である、業力不可思議と言つて、一方には佛樣は偉大なる絕對の力を有つて居られるけれども、吾々の煩惱力も亦これ不可思議といふ大關であつて、偉大なる救ひの佛樣と取つ組合をして、何時も之を負かすのである、負かすから自分が又餓鬼に行き地獄に行くやうになつて始め無き以前といふ幾萬年とも知れない前から、永い間の流轉を辿つて、救ひの網が來てもその網を打切つては顚倒かへり、打切つては顚倒かへりした、非常な優勢な惡人である。だから今度ばかりが善人とは言へない、今度もやはり救ひの網を切つて、又顚倒かへつて或は地獄、餓鬼、畜生を辿らんとして居る、お互ひがさうである、皆一寸油斷をしたならば直ぐ顚倒かへるやうになつて居るのである、それであるからどうしてもこの信根を打立てゝ行かなければならぬ。

六、念根の養成

それから次は「念根」と言つて、一旦善い話を聽いたり、或は信仰を極めたならば、之を憶念して忘れないやうにしなければならぬ。例へば一遍富士の山を見たならば、忘れやうとしても忘れられない、「何時か見たけれども富士の山はどんな格好をして居つたか忘れた」といふ人は無い、パッと明晰に意識すれば一遍で覺えられる、けれどもその他にも東海道には山が幾らもあるが之は覺えられない、「あの山は何だらう、始めて見るやうな氣がするが」といふのは、その山に對する意識が透明でないからである。さう云ふ風に惡い思想といふものは怖いものだといふ事を本當に意識して、孫子の代まで忘れぬやうにして行かなければならぬ、それを油斷をすれば、自分の子供が、　至尊陛下に爆彈を投げ、或は國家を破壞し、人類の敵となるやうな惡魔の奴隷、魔王の眷族となつて永遠に人を毒殺するやうなものになつて行くかも知れぬ、今の所謂ワイ〳〵言つて居るやうな人達は、皆地獄の底に押籠められて、青鬼、赤鬼にどせう骨を打折られる手合である。冗談ではない、一旦誤りを取らうならば、その人の無限の生命が罪惡の爲に苦みに陷るのである。

思想の自由ぢやと云つて居る人々をして誤りを重ねしめないやうにしてやらねばならぬ。尤も一部分の特別研究者といふ者は別問題である。虎列刺の黴菌の研究をやるとか、黑死病の研究を特別にやるといふ

人はある、併しそれは特別にやるのは宜しいが、普通の家庭に於て無闇にそんな事をやつては困るから、特別なる研究をするには試驗室、研究室を拵へて、外來人の一人も入らないやうにして、嚴密なる方法に於て研究しなければならぬ、てあるから兎に角今は大事な事柄に就て孫子の代まで忘れぬやうにといふ事が念根てある。

七、精進根の養成

それからモウ一つ「精進根」と言つて、その善いと極めたものを失はないやうにすることが大事てある兎角人生は一日善いと思ふた事も、色々惡い事を聽かされたり、間違つた事を見たり、又自分の友達などが誘惑する爲に、段々變つて行く、正義の軍が賊軍の爲に包圍されて破られさうになつた時には、宜しく援兵を送つて正義の軍の弱らぬやうにしなければならぬ。信根なり念根が煩惱の爲に包圍されて居ると云ふならば、丁度ニコライエフスクに於て日本人が殺戮れさうになつたといふ時には、後から早く援兵を送れば宜かつた、それが氷が張つて居つたとか言つて、日本の援軍が列達せぬから、とう〳〵女子供まて慘殺されたのてある、精進根とは恰かも援兵を送るが如しと釋迦如來はお說きになつて居る、王よ、汝の部下が敵軍に圍まれて勇奮苦鬪して居るのを城の上から見た時どうお考へになるか、あゝ危ない、早く殘りの兵を送つて援けよと命ぜられるてあらう、そのやうに正義の志が包圍に陷つたり、正しき信念が賊に圍まれて、惡い考の爲に正義の觀念が破られさうになつた時には、直ちに援軍を送つて之を援けなければならぬぢやないか、今日日本の佛敎が腐敗したといふことも、始めは立派な信念を有つて居つたのてあるけれども、色々の誘惑、色々の惡思想などの爲に包圍に陷つて、日本の佛敎徒が捕虜となり、正義の軍が破られてしまつたものてある。日蓮主義の人達がドンドコ法華になつたのも、日蓮聖人に依り法華經に依つたならば、こんな腐つたものには決して成らぬのだけれども、正義の信仰、正義の思想が重圍に陷つて悉く捕虜になつて終つた、この法華の精神が腐つたといふものは、皆悉く正義の軍が破られたのてあるその場合に何が援軍かと言へば、敎を聽くといふ事が援軍てある。正しき敎を聽かないから前に一旦定まつた信仰が重圍に陷つて免れることが出來なくなるのてある。即ちこれは度々說敎を聽いたり、或は書物を見たりして、後から〳〵正義の援軍を送らなければならぬ。今日私の講演に依つて若しも諸君の感動が強かつたならば、一聯隊の援兵を送る人もあるだらうし、一旅團送る人もあるだらうし、一師團送る人もある。そこて又力づいて一旦信心のヘナ〳〵になつて居つたのが、この援軍に依つて更に偉大なる力を現して來る、それが精進根といふのてある。

八、定根の養成

それから次は「定根」と言つて、人生は複雜なものてあるからどうしても、落ついて物を考へなければいけない、兎角すると目前の事に氣を取られて、何てもない事に次から次と追はれて、朝起きて飯を食つてしまふとその中に人が來る、ソラ葉書も書かなければならぬ、あそこから蜜柑を貰つた、お禮も言はな

ければならぬといふやうな事て、詰らぬ事にいら〳〵して居る、その中に日が暮れた、布團も敷かなければならぬ、便所にも行かなければならぬと云ふやうな事て、迂かりしやうものならば所謂雜然たる事の爲めに、その日〳〵が濟んてしまふのてあるから、如何に忙がしからうともモ一つ根本の精神に歸らなければならぬ。さうして抑々人とは何ぞや、人生とは何ぞや、佛とは何ぞやといふやうな事を眞面目に考へて見ることがなければならぬ。そんなパンを貰つた返事だとか、夏蜜柑の皮は斯う剝かなければならぬとかいふやうな事ばかり考へて居つてはいかぬ、一切を擲つて一番大切な事に向ふのが定根といふのてある。毎日顏を洗つた時でも寢る時でも、何時でも宜いから根本の精神に立歸る時がなければならぬ、それを次から次と現れる所の緣塵と言つて、他から來る塵みたやうな事に心が引張られて行くから、さつぱり力が無くなつてしまふ、都會生活は殊にさうてある、だから餘程宗教を强く打込んて、如何に忙がしくとも朝の二十分なり三十分なりは、何事も世の中の事は考へない、これは神聖なる時間てある、女房も物を言ふなと云ふだけの落附きがなければならぬ、この時間ばかりは侵されてはならぬと云ふ所を決めなければ、何ても這入つて來る、「一寸二分間御面會を願ひたい」「イヤいかん、この時間は入定三昧てあるからいかん」といふやうにして、それは二十分が長過ぎれば十五分ても十分ても、神聖なる時間を一日の中に作つて、その時間に於て精神の安定を圖り、偉大なる觀念を養はなければ駄目てあります。

九、慧根の養成

それから次は「慧根」と言つて、これは智慧てあるが、佛教て智慧といふのは善惡を見分ると云ふのてあつて、小さい事を機械的に知る意味てはない、道德的の大事な事を判斷して行くのが慧根といふのてある、前にも申した通り人間には本能といふものがある、良智良能といふものがある、大抵の事は自分の心に考へたら能く分るのてある、親に孝行すべきか、すべからざるかと云ふやうな事は、議論て研究するよりは自分の誠心に歸つたならば、直ちに決定を與へるのてある。その慧根といふのを間違へて、今の西洋の學問の樣に屁理窟から屁理窟を傳うて居るから、判斷の能力が無くなつてしまふ、大體議論などと言つて、何が決定を與へるのか分らぬ事に、次から次とやつて、行くものてあるから、學問した人ほど物を判斷する事が出來なくなつて居る、學問して意思が弱くなるといふのはそれてある、疑ひの心といふものから行くから慧根といふものが無くなつてしまつて居る。學問したから智慧があるのてはない、小さな智慧はグヂャ〳〵あるけれども大事な事が極らぬ、意思が薄弱て一寸ぶつかればハヽンと參つて終ふ、さうして慧根といふものが段々薄らいてしまつて、唯だ小さな事だけを考へて居る、それてはいかぬ。

聖德太子の憲法に就て（三）

本多日生

十　賞罰必當

その次の第十條には「當罰必ず當てよ」といふ事が示されて居る、これは讀んで字の通りて、人を賞與する事とそれを處罰する事に就ては、功の無い者を褒めたり、罪の無い者を罰してはいかんから、能くそれを調べて間違の無いやうにして行かなければならぬ。餘り功の無い者が賞を受け、罪無き者が罰せられるといふ事になると、逆も世の中は無事ては治まらぬ。それは唯だ法律の條文をキチッと定めるとか、さういふ事だけてはいかぬ、先づ自分の心を清くして、仰いて天に察し、俯して地に觀て、天地に俯仰して恥ぢざる精神に依つて、事を判斷する者は先づ己れを淨くして、黨派の觀念に囚はれたり、情實に囚はれてはいけない。實に美しい所の天地のやうな淨い精神に戻つて、賞罰は行はなければならぬといふ事を示されて居る。

十一　國靡二君

次に第十一條は「國に二君靡し」といふ事をお示しになつた、是は即ち我が國體を發揮された所のお言葉てあつて、國に二君なく民に兩主なし、日本人は皆皇室を戴いて居るものてあつて、所謂封建政治は認められないのてある、億兆みな君を戴いて行くのてある。それがいろ〳〵仲間に大名があつたり、將軍があつたりして、稅金も二重に兩方から取ると云ふ事になつては、國民の負擔が堪えられぬ譯てあるから、政令一途、億兆みな皇室の臣てあるといふ事になつて行くのが、日本の國體てあるといふ事をお示しになつて居るのてあります。決して聖德太子は佛教に阿つて國體を忘れられたナンといふ譯ては無い、聖德太子に依つて國體が發揮せられ、儒教も佛教も併せて發揮されたのてあります。殊に聖德太子の娘御の方が、又この意味を非常に强く言ひ現はされて居つて、我が國體を明かにする古い言葉としては、聖德太子のこの憲法、又その聖德太子の娘御の言はれた言葉等が、非常に有力な證據になつて行くのてあつて、即ち聖德太子は我が國體を發揮したる所の先覺者てある。

十二　共同相和

その次の第十二條には「共同相和」といふ事を示された、これは職務に就て書かれて居る。前には分掌といふ事があつたけれども、併ながら同僚の中に或は病氣て缺勤する者もあつたり、その他の理由に依つて缺勤する者もあるのてあるから、さういふ場合には手傳はなければならぬ、分掌は明かにせんけれ

ばならぬけれども、共々に助け合つて行くといふ事を考へて、政治上の事は申す迄もなく、總ての仕事をするのに、互に邪魔をし合ふとか、そんな事は俺は構はぬといふやうな輕薄なことがあつてはならぬ互に相助けてその仕事をしなければならぬ、政治のことは人民から言へば、一日も早くいろ〳〵の願書等を許可して貰ひたいと思つて居るのであるから、その係りの者が病氣して居つたならば、その仕事を皆がうつちやつて置くといふ事はいけない、必ず他の者が手を繰合せてその仕事を辨じてやらなければならない。病院などでもその通りで、係りの醫師が缺勤したと言へば、他の者が都合をつけて病人を見舞つてやるといふやうに、相共に助け合つて行かなければ、「彼が缺勤したつて俺が知るものか」といふやうな考へでは宜しくない。殊にこの事柄に就ては日本には弊害が起つて居るので、島國根性と言はれて居りますが、共々に仕事を大成して行かうといふ觀念が乏しいように思ふのであります。

十三　無有嫉妬

次には第十三條に於て、一層明かにその弊害を警められたので、「嫉妬あること無かれ」といふ事が示されて居る。嫉妬といへばやきもちでありますが、やきもちと言つても廣い意味でありますから、總べて人の己れに優ることを嫉み、他人が褒められるのを聞いては氣持を惡く思ふといふやうな風で、人を惡く言ふのを聞いて喜ぶ。新聞などでも日本はさう云ふ風になつて來て、人の善い事を紹介したのでは喜んで讀まない、惡口を書くと皆喜んで讀む、それは自分の心が低くなつてしまつて、嫉妬心が旺盛になつて居るから、人を攻擊する事を聞いて愉快を感ずるのである。政治上の議論でも攻擊さへすれば勢力を得る、併し眞に政治の爲めと思ふならば、攻擊ナンといふやうな消極的の事をしても何にも役に立たぬ、打壞してある、人が家を組立てゝ居る所に行つて、拵へ方が惡いと言つて打壞す、これが攻擊である。攻擊といふ事が日本の政界に勢力がある間は日本は進歩しない、政治の運動は巡査と喧嘩をしたり、議場でドタバタやるばかりではいかん。他人の政策を批評するならば、「この事は斯うしなければならぬ」とか、「君は斯うやつて居るけれども、それより斯うした方が宜からう」とか言つて、建設的の意見を出さなければ駄目である、それを出すが爲めに少し位人のやつた事に就て批評するのは宜いけれども、自分は空ツポで唯だ惡口ばかりいふ、「それはいかん、これはいかん、いかん〳〵」といふ、「それじや君の意見はどうぢや」「俺は些つとも考へて居らぬ」といふやうな事で、唯だワイ〳〵言ふ、實にその點はをかしい程今日は愚な狀態になつて居る。それは西洋の政治が嫉妬の塊とまで言はれて居る、西洋風とはやきもち風なりといふ位で、非常に人心がやきもち根性に出來て居る。亞米利加は自由國だナンといふけれども、共和黨と民主黨の爭ひを御覽なさい、實に極端なるものである。國際聯盟のやうな重大な事でも、黨派觀念の爲めに今尙ほ調印もしないでガヤ〳〵騷いで居る。總ての政綱といふものは彼が左といへば此方は必ず右といつて喧嘩して居る日本の村會議員の喧嘩と同じ事である。それが何も一番政治上に於て自由進歩の國ぢやといふことはありはせぬ。唯だ西洋は喧嘩である、時には反對黨の政策と雖も、如何にも見上げたものだといふ事が、

一つ位ありさうなものだが、一から十まで惡口をいふ。であるから政府彈劾案などを見ても、公平な批評といふものは無い、皆冒頭から罵倒して行つて、政府の罪惡を數へて、是れその一也、是れ二也、是れ三也といつてやつて居る。又一方之を辯護する者は、是も嘘なり、是も嘘なり、皆嘘だといふ、實に劣等な鬪ひである。政治の鬪ひはもう少し公平に、吾々が局外から觀て居つても、そこに一勝一敗、結果がどうなるかといふ面白味が出て來なければならんけれども、今日は何をやつて居るのかさつぱり分らぬ、唯だ一時ガヤ〳〵言つても、終ひには否決かといふやうな譯で、何等興味が無い。斯の如くにして政治が健全に發達する譯が無い。芝居なら芝居が幾ら演つても面白くないといふのであつたならば、流行る理窟が無いぢやないか。今のやうな事をやつて居つて、議會の議事でも吾々も據なく讀むけれども、讀み終つて「ハヽアこんな事か、毎日下らぬ事をやつて居る、落つく所は大抵こんなものだらう」といふやうな感じを起すばかりである。モウ少し議政壇上に於ては、「昨日までは斯う思うたけれども、あの人の議論を聽いて成る程尤だ」といふ啓發する所がなければならぬ、これは總ての事を姝妬からやるからあゝいふ事になる。勞働運動でも互に姝妬を取除いたならば、餘程良くなる、互に誤解をし合ふといふことはやきもちから起るのである。やきもちといふと一寸よく分らぬけれども、亭主が歸つて來た、一寸何かプンと匂ふと「この匂ひはどういふ譯です」と言つたり、「こんなに歸りが遲いのはどういふ譯です」「イヤ電車が停電した」「停電ナンてそんな事が度々ありますか」といふやうな事で一々文句をつける、それがやきもちといふものださうであるが、さういふ工合に非常な想像を加へて誤解を交へて行くといふ事が多くなるのである。世の中から左樣な誤解を除き、想像を除いて、赤裸々に双方の考へのある所を打明けたならば「あゝさういふ事でしたか、それならやきもちを燒くどころではない御苦勞さんでありました、あなたは私の爲めに一生懸命いろ〳〵の事を心配して下さつた。それぢやアお茶も這入つて居ます、お鮨でもお上んなさい」といふ事になるのである。勞働問題でもその通りで、互に人を疑ひ合つて「己れッ、己れッ」と言つて居る。モウ少し相互が打解けて了解して行かなければなるまいと思ふ、いきなり口を尖らして「何だい」「ナニッ」「フヽン」といふやうな態度である、をかしな話ぢやないか。多くの者の代表者となつて互に利害の衝突點を論ずる時などは、殊更ら顏色を和らげて、相互に言葉を慎んで、「自分だけの考へではありませんが、大勢の事ですからいろ〳〵面倒も申上げて、御迷惑でもありませうが」と云ふ位の挨拶はしなければならぬ。相撲取が素ッ裸で相撲を取る時分でも、いきなりヤッと飛びつきはしない、ちやんとお辭儀をしてやるぢやないか。それを相當の人格のある人間がやるのにプン〳〵口を尖らして、作法も何も無いといふのは間違つて居る。これ皆西洋から來た弊害である。日本で言へば相撲取のやうに裸の藝當でも、禮法を守るやうに教へられて居る。堂々たる一國の大事を解決するに就ては、相撲取以上の禮法は守らなければならぬ。それが守れないのはやきもち根性から來るので、想像と誤解とで揑ね廻した結果が、あのやうな事になると私は考へる。

故に斯樣なやきもちを燒くと、賢哲の士が世の中に出なくなる、人が立派になりかければ非難して倒してしまふ。日本の政界にも人物が段々無くなつてありませう、これは皆が非難して人物を造らないのである。坊さんの中にも人物が無いでせう、これもいろ〳〵の原因から出て居るけれども、少し良く出來かけた人は皆が寄つて蝟つて苛め倒してしまふてあるから少しも人物が出ない。斯くも粕ばかりだと思ふ程である、それは素々さう粕ばかりでもないが、粕のやうにしてしまふ。偉大なる宗教家が出やうとすれば、やはり他からやきもちを燒いて、あらゆる譏謗中傷を加へて傷けてしまふから、平凡なる者ばかりになつてしまふ。賢哲の士を造り出さうといふには、國民がやきもち根性を捨てゝ、これは偉らさうな人が出來かけたといふ時には、共に助け成すといふやうにして、賢哲の士を造らんければならぬ。賢哲の士出てずんば、遂に國家を治める事は出來ないのである、如何に政治上の形式を改めやうが組織を改善しやうが、ポンクラばかり寄つたならば幾らやつても駄目である。今日は形式論ばかり喧ましく言つて、眞の人物を造る事を考へない、それであるから政治は少しも進歩しない、それはどうしてもやきもち根性を捨てゝ、一人でも良い人を造り出すやうに、各々助け成すといふ美風を作つて行かなければならぬ。それにはやはり宗教信念の培養に依つて、やきもちを直すのが必要である。斯う申すと宗教家の方でもやきもちを燒くぢやないかといふけれども、これは坊さんと言つても、坊さんの働く方面、開拓の方面を無くなして居つたから斯うなつたのである、德川時代には改宗改派が出來ぬといふ事になつて居つたから、幾ら努力しても一人の檀家を造る事も出來ぬ、幾ら怠けて居つても一人の信徒をも失はぬといふ事になつて居つたから、そこで皆が進み行く發展の進路を塞いだが故に罷つたのである幾ら努力しても餘所に發展が出來ないから、內輪で喧嘩などをするやうになつた、これが自分の腕次第に依つてドン〳〵開拓されるといふ事になつたならば、何時までも詰らぬ喧嘩などはして居らぬ、何處にても新方面を開拓するやうになるのである。日本の民衆教化運動も、新しい方面に開拓が出來る時には、決して左樣な愚な態度は取らぬ。日本人はどうしても玆に宗教に復活して、宗教の改革をせんならんけれども、それは宗教に附屬して居る者が腐つて居るのであつて、日本の宗教即ち佛教そのものは少しも腐つて居らぬ、法華經は今尙ほ一點でも蟲が喰つたものでない、日蓮聖人の遺文も嚴在して居る、一切經七千餘卷の經典も一枚も反古にはならぬ、この偉大なる佛教に依つて活きたる精神を以てこれに進んで行きさへすれば宜いのである、そこから行かなければやきもちも癒るまいと思ふ。小さな學說や議論や、そんなものは役に立たん、もつと根本を改めて、先づ國民全體が水でも浴びて掌を合せて「恐れ入りました」といふ所から出直さなければならぬ先づ宗教である、宗教を以て人心の大改造をやるより外に現代を救ふ道はないと思ひます。

十四　背私向公

次に第十四條には「私に背き公に向へよ」といふ事である。一個人の利害を捨てゝ公益とか國益に向つて行かなければならぬ、一私人の意見を中心として事を爭ふ時に於ては、何時まで經つても喧嘩の果て

しはないのである。若も君にして私ある時に於ては臣これに背き、臣にして私ある時には君が之を罰するといふ事になるから、自分の人格を淨めて、さうして公なる心、今日で申せば社會奉仕の精神、國家に貢獻する精神を養つて、さうして一私人の利害は犧牲にすると云ふ事にして行かなかつたならば、到底世の中がうまくは行かんといふ事をお示しになつて居るのである。

十五　使民以時

それから第十五條には「民を使ふに時を以てす」といふ事。これは昔は稅金の代りに人夫として使つて居つたのでありますから、農桑の忙がしい時に無闇に工事を起したりしては、人民が迷惑するといふ事であつて、今で申せば稅金を取立てるにも餘程人民の都合を考へて、稅務官吏なども能く考へてやらなければ、同じ徵るにしても無理非道な事をやるとか權柄づくでやつたりすると、民心が國家から離れるやうな事があるから、民を使ふに時を以てすといふ意味を活用する時に於ては、詰らぬ事で人民を背かしてはいけないのである。裁判所に證人を喚出して置いて、二時間も三時間も待たして置く、と云ふやうな事もある、これはモウ少し能く考へて、この事件を先きにやるからこの人間は十一時で宜いと思ふたら、十一時に喚ぶやうにしなければならぬ、それを何でも構はず九時に出頭しろと言つて置いて、長い時間待たして置く、さういふやうな事も大いに考へなければならぬ。或は父役所に行つて、待たした限りで役人が忘れて居つたとか、或は友達と無駄話をして居るといふやうな事で、大變な迷惑をかけるさういふ事もいかぬ、民を使ふに時を以てすて、無駄な事が無いやうにやらなければならぬ。書類の字が一字位違つて居つたからと言つて、印形を持たんといふと歸つて印形を持つて來いとか、一字位の事でそんな事を言うのはやはりいかん。それは秩序を保たんならぬ所は壞はしてはならんけれども、さういふやうな小さな事柄が往々人心を背かしめるのであるから、さういふ事を愼むのが、民を使ふに時を以てすと云ふ事の活きた精神であらうと思ひます。

十六　與衆宜論

第十六條は「衆と宜しく論ずべし」といふ事である。これは國家の大事に就て言うてあるので、小さな事はそれ〴〵獨斷專行でも宜しいけれども、國家の大事は民衆と共にその事を能く話し合つて、間違ひの無いやうにせんければならぬといふ。これは今の衆議院などの意味と同じ事で、民意を尊重するのである。憲法政治は西洋から來たものではない、昔から日本に於ても、「大事は之を獨り斷ぜず、衆と與に宜しく論ずべし。小事は是れ輕し、必ずしも衆と與にするに足らず。」と示されて居るのである。

十七　篤敬三法

それから最後の第十七條には「篤く三法を敬へ」とお示しになつて居るので、「篤く三法を敬へ、三法とは儒と佛と神となり。」と言はれて居る。始めにあつた通り儒教・佛教・神道を尊んで行かなければならぬ、これは如何なる時、如何なる人でもこれに從ふべきである。「何れの世、何れの人か是の若きの法を蔑ざらん」。若しこの三つの法、即ち佛教なり儒教なり神道なりを捨てたならば、どうして狂れるを直しくするか、人間の了簡が拗けて行き、世の中が濁つて行くのを直す力は、この三つの教を盛んにして、教

化の力に依るより外、人心を救ふことは出來ない、世の中の濁りを救ふことは出來ないと仰せられた。この言葉が十七憲法の終りの言葉である。「三法に歸せずんば、何を以てか枉れるを直うせんや」。之を捨てたならば枉れる者は益々枉るのである、拗けた者は益々拗ける譯であるから、この教を輕んじたる結果が今の日本の禍ひとなつて來て居るのである。既に世界がその禍ひを受たので、歐洲戰後の大經綸としては、教化事業の復活が盛に唱らるゝに至つて、內務省の民力涵養の中にも、第一の事業は教化事業を普及徹底せしめよと訓示されて居るのである。大隈侯爵が昨今「教化的國家」と題して、日本は教化を本にして、內には民心を教化し、人格を向上せしめ、外は國家の行動を教化的觀念からやつて行く國である、日本は決して侵略的の國家ではない、實利的の國家ではない、日本は教化的の國家であるといふ事を力說さるゝに至りましたが、これは洵に結構な事である。後れたりと雖も兎に角結構な事である。

それでどうしても今後日本の國を根本より打立てゝ盛ならしめ、日本の天職を全ふしやうとするには聖德太子の憲法にお示しになつて居る事の如きは、その意味合を能く活かして考へて行かなければならぬと思ふのである。この十七箇條を御覽になれば、千三百數十年の昔に制定された憲法が、如何にも現代に適切なる意味を持つことに驚かざるを得んではありませんか。現代の弊害と併せて考へて見て御覽なさい、先づ現代は和を破つて反抗心が盛んになり詔を輕んずるといふ事はあるまいけれども、民意尊重の聲のみ高くして、詔に對する敬虔の態度が薄らぎつゝあるかの如く思はれる。又秩序を捨てゝ禮を破るやうになり、誹謗の方は、これは能くは分りませんが、いろ〳〵やはり面倒な事があるやうに思ふ。又勸善懲惡の教化も衰へて居るし、各々任掌を分つといふことに就ても、これは先づ今の所十分に行つて居るやうに見えるけれども、それでも責任觀念が十分でない。それから役人の能率は是れ亦非常に低劣なものである、官吏の怠業に至つては實に激しいものである、極端にいふならば、今の半分の人でも十分政務は執れるではないかと考へる、さういふ點も現代の弊害となつて居る譯であるから、之を匡正しなければならぬ。それから信義の事、肝癪玉の事、賞罰の情實に囚はれざる事、國體を擁護する事、共同諸和する精神、嫉妬を捨てゝ公けに向ひ、人民に同情したる政治を執り、衆と與に議し、稅制を愼重にし、篤く三法を敬つて教化中心の文明を築くといふやうな事に就て考へたならば、千數百年前に聖德太子が大達見を以て現代匡救の寶典としてお書きになつたが如くに盛ぜられる。玆に東洋文明の偉大なる所以がある、古い千數百年前の事が、今日に持ち來つても、尙ほ適切なる意味を持つといふに於て、實に我が文明は尊といと思ふのであります。西洋の思想などは三年か五年經つと全く不用に屬するやうな事を、次から次へと網渡りをやつて居るのでありますが、この系統的文明を戴いて居る我が國民は、益々この文明を擁護して、何處までも我が國家の隆盛を圖らなければならぬ。國が破れたならば斯の如き偉大なる精神的文明も皆破れてしまふのであります、吾々は飽く迄も人類の幸福を招來すべく、我が精神文明を擁護する爲めに、我が國家の發達を圖らなければならぬと思ふのであります、（完）

本經祖書要文講義

（講妙會に於て）

本多日生

講妙會の講義を開始することに相成りましたが、講妙會は創立以來種々歴史を有つて居るので、この會を永續せしむることはこの歴史に顧みて大切な事であらうといふ協議から、茲に開始することになつたのであります。尤も暫く休會をしましたのも種々他に會があり非常に多忙でありまして到底時間を割出すことの出來ない爲めに、已むなく暫時休會をしたのであります。茲に再開するに當りましてその講本を考へねばならぬのでありますが、講妙會に於て既に講述したものは法華經全部に亙つて二回、又日蓮聖人の御遺文に就てもその有力なるものは殘らず講じ終つたのであります、又一切經に亙つて有力なる御經は澤山講じたのでありまして、最早や大藏經の中に就ても、あと講ずべき御經は數少いくらゐに進んで參つて居る次第であります、未だ少しはありますが、この際大藏經の殘りをお話するよりも、繰つて法華經と御遺文との中にある大切なる所を纏めて、極く簡單なる講義の中に全體を納めて居るやうな意味の講述をして見たいと思ふのであります。丁度前年『本經祖書要文』と題して撰拔をして置いたものがあります、これは『聖語錄』に於て法華經遺文等に亙つて廣く撰拔をしました、その以後に又それを精撰して、更に聖語錄以外に本經祖書の上に亙つて考察を遂げて、先づこれだけのものがあれば、最も簡易な日蓮主義の教義信念が打立てられると認めたものを集めたのであります。非常に廣く一切經に亙つて進んで行つたから、今度は繰つて最も要領を得た日蓮主義の研究に戻つて見たいといふ考で、この要文に就いて數回に亙つてお話を申さうと思ひます。

この『本經祖書要文』の選述は發心篇、宗旨篇、信仰篇、道義篇、護法篇、得益篇、警策篇の七篇に分れて居るので、この七つの表題に於て大體が纏ることになるのであります。これはいろ〳〵考察の結果でありまして、唯だ一時の思ひつきで選んで居る譯ではないのであります、他にもいろ〳〵大切な問題はありませうけれども、先づこの七つがあれば日蓮主義の教義信念を纏めて行くことが出來ると信じてこの七篇に分つたのであります。

先づ第一篇の發心篇に就て講述を進めやうと思ひます。發心といふ事は宗教心を發起するといふ意味でありまして、元來人間には宗教心を固有して居るので、それが緣に觸れて發生するのであります。その宗教心の分類は少くも六つや七つ數へ擧げなければならぬと思ひますけれども、今はそれ程詳しくは見て居らぬのである、先づ最も廣く動く宗教心は感應的宗教心であつて、人間は宇宙の絶對者に對して渴仰を起し、又それに信頼して自分を導いて貰ふ、守つて貰ふといふやうな感じを持つので、之が爲に古來宗教が人類の中に發生した譯である。それは人

生に種々なる出來事があつて、その刺戟に遇ふことに依つて必ずや宗教心が發生するのである。それ故に形の宗教を滅ぼしても、直ぐに人間の心の中から宗教が發生して來るので、人類のあらん限り宗教は絶滅することの出來ないものであります。

又實在的宗教心といつて、吾々は生命の永存を希望するのであつて、現在の生活にも命の長からむことを望むが、死後にも不滅の生命を認めて行くものである。唯だ理窟で一時靈魂滅亡といふやうな事を言つても、人間の情意は必ずや生命の永存を希望する、又學問の方からも靈魂の不滅は論證されるが、論證を俟たずして、死んでも死にたくないといふ感じは非常に強いものである。故に教へなくとも、議論しなくとも、人を自然の性の儘にして置けば、靈魂不滅といふ觀念が働く、そこに宗教が發生する。如何なる野蠻人の間にも、人が死んだらそれ限り消えるとは思つて居らない、必ずやその靈の存續を考へて居るものである。

又道德的宗教心といふか、人は善を爲さうとしても常に力が弱くあり、却つて惡を爲すやうな場合が多いものであるから、どうかこの善を爲す精神を助け成して善を爲すに都合の好いやうにするには、やはり味方を宗教の神・佛のやうな所に得て、さうして自分を反省し、且つ自分の力を增して行くやうにしやう。惡い事は惡魔が助ける、善い事は神・佛が助けるといふ感じの爲に、善い事を盛んに行はうとし宗教に結びつく所がある、即ち道義上の感情が宗教に來るのである。それ故に宗教にまで進んで居らぬ道德でも、例へば儒教が「至誠」を說く場合には、天を敬ふ事に依つて至誠が導かれる、又天道を畏れる事に依つて人の性が正されるといふ風に考へて、天道を以て道德の根據に置いて居る。又日本で敬神の觀念若くは忠君の觀念を道德の根本に置いて居るが、この敬神・忠君にはやはり一種の宗教的感情があつて、さうしてそこに誓ひを立てて、その觀念に歸る時己の穢れた精神を拂ふのである、神の前に淨め給へ、祓ひ給へといふ事を言ふのは、即ち我が心の不道德なものを取拂ふといふのである、又忠君の心に歸つた時、己の卑しい考が切捨てられる。我國の神を思ふといふことは、唯だ神を思ふてはなくして、それに依つてあらゆる人間の穢れた精神を追ひ除ける力があるので、即ちそこに宗教的の働きが現れて居ると言つても宜いのである。さういふ事は倫理學からでは分らない、忠と言へば唯だ君に對する道德と思ふけれどもさうではない、君を思ふ心に依つて總ての德性が導かれて來て居る。それは道德が宗教と結んで能く行はれることを證明して居るのでその意味が發達をしてそれが完成すれば、所謂道德的宗教心といふものを滿足せしめる事になるのであります、そこ迄繋がつて居るのである。宗教を嫌がる抔といふのは、暗愚にして物の道理の分らぬ人がやることである、心理學的に研究したこともなければ、又日本の道德に就いてもその微妙な點を觀察しないのである。唯だ或る一種の感情から宗教が嫌ひだとか、儒教はいけないとかいふやうな、愚劣な感情を前提としてやつて居るのである、さういふものは忠實に思想を研究する人として見るとは出來ない既に囚れて居る所の人であると思ふ。公平に研究すれば道德的宗教心は、古今東西に亘つて人類のあらん限り無くなるものではない、それはあらゆる事に實

現されて居る、釋迦が出家得道せんとして、志を立てた時でも、彼にはそこに道德的宗教心が動いて居る一夜庭園に出て天を仰いで閻浮樹の葉の動いて居る下から星のキラ〳〵するのを見て、さうして如何にも天地は美しく澄み渡つて居る、そこには我がこの清い精神を助けて呉れるものがあるに違ひない、どうか佐助せられよといふ事を言つて居る、やはり自分の道德精神を助け成せよといふ事を願つて、それから遂に王城を出たのであります。誰でも何か偉大な清い考を以て出發しやうとする時には、そこに必ず宗教感情が動くものである。別段教義があるとか、說明があるとかしないでも、人間自然の性情の下にさういふ感じが起る。東郷閣下が對馬大海戰の時に天祐を言はれたのもやはりさうである、大事に臨んで自分の國家に捧げる所の淸い道德感情が動いて、それが進み行く所には、どうしても宗教性に結びつかんければ滿足しないのである。孔子が「天德を予に生せり」と言つたのも、やはり道德性と宗教心とそこに結合したのである。その微妙なる所を解釋せずして、それは道德ぢやとか、いやそれは宗教ぢやとか言つて分離しやうとするけれども、さうではない、眞正なる道德と眞正なる宗教とは離るべきでない、それが吾々の固有して居る宗教心である。

又推理的宗教心といつて、偉大なる眞理を握らんとする時に宗教に入るのである。小さな科學以下の知識は人間の智慧でやらうとするけれども、この絕大なる眞理、宇宙の大法則であるとか、宇宙の實體であるとか、吾々の生命の本體であるとか、又この文明に就ての完全なる理想は如何にあるべきかといふやうな事を、眞實に研究する時には、そこに宗教

が動いて來る。どうしても宇宙の實體を見る時にも天道とか或は佛とかいふやうな感じに繫がる、そこまで行かなければ吾々が眞理の研究に於て滿足し得ない、又理想の文明といつてもやはりその通りで、宗教が言ふが如く、總ての前、佛の前に子として立つが如き、非常な溫かなる、所謂淨土を地上に現すとか、天國を地上に現すとかいふやうな意味合――日蓮聖人の言葉を以て言へば『世は義農の世となり、吹く風枝を鳴さず』といふやうな理想の世界を考へる時には、どうしてもそこに宗教性が動いて來る。今の慘忍酷薄な生存競爭を目的とし、或は經濟上に於て階級の戰爭をやるとかいふやうな、さういう慘虐な文明は最も低いものであつて、少し退いて考へたならば、誰も是に於て滿足を謳ふことは出來ない。だから例へばカーネギーといふやうな人が、モウ金も出來てしまひ、今の世の中はこれではいくまい、どうしたら宜からうかと懸賞論文でも募集した、それには必ずや宗教的安心に結びつかなかつたならば、理想の文明は說明することが出來ない。あらゆる點に於て偉大なる眞理の研究に入つた者は、知らず識らずの間に宗教に赴いて、そこに滿足が得られるのである、即ち哲學の結論が宗教に入るのであります。

いま一つは神秘的宗教心と言つて、左樣な理智の方から行かなくても、人間は智慧に限りあることは初めから分つて居るし、宇宙の總ては偉大なるものであるから、そこで吾々の智力の及ばぬ即ち神秘の所にどういふ作用があるか知れないといふ感じを有つ、そこでその偉大なものに自分が頼らうとする精神が神秘的に動いて來る。尤もその中には迷信的の

ものが非常に澤山あるけれども、それは宗教に附隨して起る弊害である、さういふものを切捨てゝ極く正しい意味に於ても神秘的の宗教心が殘るのである神秘的に考へる事の總てが惡いのではない、それを濫用したり、それに附着して動く、常識に於て否認されるやうな事までも、名を神秘に籍りてやるからいけないのだけれども、さうでなくして一種の偉大なる神秘がある、そこに宗教性が動くのであります。

それから父人は總べて穢れがあり罪があるといふ事の反省心があつて、懺悔する心があり、反省する心がある、そこに宗教心が動くのである。一旦犯した罪を悔いてそれを打消さんとするときには、どうせ道德の方に於ては惡い事をしたのを消す力がない宗教に來れば一度やり損うた事でもそれを打消す力がある、基督教で言へば「悔ひ改め」といひ、佛教で言へば「懺悔」といふ、この懺悔の宗教心といふものは亦強く現れて來るものである。それは極く大事なことで、人間が最初から過ちなく進み行けば宜いけれども、その經過する間には青年の時代もあり血氣に逸る時代もあり、思慮の定まらざる時代もあるが故に、孰れもそこに多少の失敗もあり罪惡もある、それを悔悟して宗教に依つて淨められるのは誠に善い事である。一旦穢れた者は最早や仕方が無いといふ自暴自棄といふことになると、益々罪惡を犯すやうになつて來る、今日の極端な破壞思想などでも、大抵は初めから極端に行くのではない、いろ〳〵の事に躓いてモウ到底清い人生を送る事が出來ない、いつ、その事激しくやつてやれといふやうなことから、過激派になる者が多いのである。そこを宗教の方では懺悔に依つて、元の清い時と同じ境遇に置かしめるといふ力がある、これは實に善い事ナンである。

この外いろ〳〵宗教心はあるのでありますが、さういふやうな種々なる宗教心の中で、更に一般的に強く動いて居るものは何かといふと、これを概括していふときは先づ人生觀と超人觀といふ二つであります。宇宙觀の方から來る宗教心といふものは、今の哲學的宗教心といふやうなものがあるけれども、その方は一種特別な思想に依つて來るので、廣く動くものは、この人生に起る出來事がいろ〳〵そこに罪があり、穢れがあり、苦みがあり、又樣々なる罪惡がありして缺陷多き人生である、事志と違ふやうな事が澤山あるから、どうしてこの人生だけを以て究極の世界とすることは出來ない、簡單に考へても死んで行くものであるし、又共に力を協せて居る人間も死んで行くものであるから、これが理想の世界であり、これが滿足の世界であるといふことはどうしても言へない、それ故に人生觀の種々な缺陷に觸れる時に宗教心が發生して來る。もう一つは偉大なる超人者を渴仰する、即ち感應の精神である、人は或る偉大なるものを渴仰して、それに導かれ守られて行くといふ感じを有つのである。

そこで今この發心篇には、その人生觀と超人觀の二つに就て、玆に法華經と御遺文の中から僅かに四つばかりの文を引いてあるのであります。法華經の中からは『譬喩品』と『壽量品』が引いてありますが、前の方は人生の缺陷に目覺めることであり、さうして或る偉大なる佛を慕ふ氣分が起つて來る。壽量品の方は正しく偉大なる佛を慕うて、その佛から與へられたる教に於て信仰を定めるといふ意味にな

つて居る、即ち人生觀と超人觀の二つの發心が兩方に書かれて居る。それから御遺文の中の『持法華問答鈔』は、人生觀から來て宗教の正しい信仰を取らなければならぬといふ事が書いてある、さうして名譽の觀念を現在に置かずして、佛や菩薩の御照覽の前に譽を博することを考へなければならぬといふので、茲には彼の道德的の宗教心が加はつて居る。それから『守護國家論』の方も人生觀からの發心であるが、併しその教を撰ぶにはいろ〳〵間違ひもあること故に、正しきものを撰ばなければならぬ、發心と、その發心に就て信仰を嚴密に撰んで、正しき信仰に入らなければならぬといふ事が教へられて居るのであります。

大僧正本多日生猊下講演
日蓮聖人降誕七百年
統一臨時增刊聖誕七百年紀念號
大正十年三月十日發行

目次

一、降誕の因緣
　イ、如來の化導を助けんが爲め……ロ、我國の文化を大成せんが爲め
二、教化の中心
　イ、法華經の教義……ロ、我國文化の正統
三、門下の覺醒
　イ、氣宇壯大……ロ、教義の給仕……ハ、信仰の低劣
四、門下の事業
　イ、信仰覺醒の運動……ロ、思想善導の運動……ハ、相互の聯絡運動……ニ、紀念事業（寺院、建築、其他）
五、統一團の覺悟　已上

定價、一部金拾錢、郵稅金五厘。百部以上二割引。施本傳導に御使用の方に對しては三萬部を限り定價半減一部金五錢の割にて頒與す。

教義

日蓮聖人教義綱要

「第四十二回」

井村日咸

第九章　得益

第六節　所期の國土

一切のものは其主體を有する以上其住處を持たねばならぬ、佛教には其主體を正報と云ひ、其住處を依報と云ふて居る、其正報が十界と分類せられて居るが如くに、其依報たる所住の國土も四つに分類せられて居る、同居、方便、實報、寂光の四土である、四土と十界の關係は下の如くに定められてある、

四土
- 同居土
- 方便土
- 實報土
- 寂光土

——

十界
- 地獄乃至天上界
- 二乘界
- 菩薩界
- 佛界

同居土とは吾人の現見せるが如き國土である、畜生界もあれば人同界もある、佛も出らるゝし、菩薩も出らるゝから、凡聖同居の世界を言ふたのである、此同居土に穢土と淨土とがある、穢土と云ふは水火風の三災に見舞はるゝ、沙礫充滿の世界である、我等實見せる娑婆世界は正しく同居の穢土なるものである、同居の淨土とは、釋尊が法華經寶塔品の時三たび土田を變じて、淸淨ならしめ給ふた、其時に影現せられた世界の狀態が淨土の姿である、經に瑠璃を地と爲して、寶樹莊嚴し、黃金を繩と爲して、以て八道を界ひ、諸の聚落村營城邑大海江河山川林藪無く、大寶の香を燒き、曼陀羅華徧く

其地に布き、寶の網幔を以て其上に羅け覆ひ諸の寶鈴を懸たり

（續、法、二六二）

等と說くもの此てある、一の世界てあるが、迷へるものの住む世界、見る世界は、穢惡充滿の世界てあり、悟れる人の見る世界は七寶莊嚴の極樂淨土の相を現はして居るのてある、主體たる吾人が迷へば憂惱苦患を受くる醜惡の姿となり、悟れは色相莊嚴の身となると同じ關係である。

方便土とは又は有餘土と云ふ、二乘の證果を得た者は見思の煩惱を斷盡して三界の生因を斷ず、彼等自身は見思の惑を斷じて三界の生因を滅し、灰身滅智せりと思へども、而も尙無明の惑斷せざるが故に眞實に滅無に歸する事が出來ない、其處て此方便有餘土に生れて、此處て更に佛陀の敎化を受けて、二乘の空執を斷じて、佛陀の正位に進み得るのてある、此處は一時の假の宿てあるから方便土と名付たものてある、實報土とは或は果報土と云ふ、一分の無明を斷盡した菩薩樣達の住居せらるゝ處てある、眞實の法を行じて勝報を感得せらるゝものてあるから實報土と云ふたのてある、寂光土とは佛陀の世界てある、普通の報相ては此世界は理性土と云ふて、理想の世界てあると云ふ、佛陀の究竟圓滿の證悟により自受法樂し給ふ常住不滅の世界を常寂光土と云ふ、此世界は凡夫や菩薩抔云ふものは一切窺ひ知ることの出來ないものてあると定められてある、然し此は一往の報相て佛陀が證悟を得て仕舞へは寂光土て一人晝寢をして居ると云ふなどは、此理窟て結構てあるが、吾人の信ずる佛陀は所作佛事未曾暫廢て暫しも晝寢は仕て居らんと云ふのてあるから、寂光土に這入て隱れては居らぬと云ふことになる。

そこて吾人が今如來の敎を信じ、其敎を行じて我身に佛陀の證悟の一部分を體現して行くに就いて、如何なる世界、國土を我々の所居の國土として撰擇するか、當節は社會問題の一として住宅難が數へらるゝが、吾人の信仰にも、此住宅問題は一の研究題目てあらねばならぬ、淨土眞宗の如きは、此娑婆世界には我等の住居なしとして、西方十萬億土の彼方に住宅を求めて居るが、此は移轉が容易なことてはあるまい、それかと云ふて誤解せられた法華信者の言ふ樣に、娑婆即寂光てあるから、此世界其儘が常寂光土てあれば外に求むるに及ばぬと云ふのも、此は又あまりに情なさ過きる、此世界此儘ては苦患が多過ぎる、今少し常住不滅の處てなければ、我等の永久の住居としては滿足することは出來ない、然らば何處に、我等の永住地を見出すか。

佛法華經壽量品に說いて曰く、

我常に此娑婆世界に在つて說法敎化す。

（續、法、三三二）

阿僧祇劫に於て常に靈鷲山及び餘の諸〻の住處に在り、衆生劫盡て大火に燒るゝと見る時も、我此土は安穩にして天人常に充滿し、園林諸の堂閣種〻の寶を以て莊嚴せり

（續、法、三四〇）

と、佛の常に在して說法敎化し給ふ處の娑婆世界、安穩にして天人常に充滿せる靈鷲山とは、此即ち我等の希求し、所期とする處てあらねばならぬ、此世界は西方の極樂世界にもあらず、又我等が日常現見せる、大火に燒かるゝ娑婆世界にもあらず、此娑婆世界の本體淨化せられたる娑婆世界を指して云ふたのてある、我等が現見せる娑婆世界は、我等の業感に累せられて、其本體を覆ひ、無常遷滅の當相を示現しつゝ常に水火風の三災に遭遇し成住壞空の四劫に遷されて居るのてある、而も本體其物は常在不滅の實體てある、日蓮聖人觀心本尊鈔に、

今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出たる常住の淨土なり。

（續、遺、九三九）

と仰せられた、此本時の娑婆とは娑婆世界の本體てあつて、我等の凡見に映ずる皮相の娑婆穢土の娑婆世界ては無い、一口に娑婆世界と云ふと同じ樣なも

のと思はるゝが、一は無常遷滅三災四劫の穢土であり、一は三災四劫を出たる常住の淨土である、此區別あることを忘れてはならぬ、淨化せられたる娑婆と、淨化せられざる娑婆と、一世界に兩面あることを見て、我等は淨化せられざる娑婆を去つて、淨化せられたる娑婆に其住處を求めねばならぬ、淨化せられたる娑婆世界は、本佛釋尊の常說法敎化の根據地であつて、此處を其敎化の中心と定めて、十方世界に應化し給ふのである、壽量品は佛陀の根本中心たる本佛の開顯と同時に、其敎化の中心地點として此娑婆世界を以てせられた、玆に本國土妙の開顯が說かれた、此娑婆世界が世尊大化の中心地點であることが開顯せらるゝと同時に、法華已前の諸經に說かれたる、西方の極樂世界も東方の淨瑠璃世界も皆是一時假設の淨土であることが顯はれて、却つて今迄穢土なりと言はれて居つた娑婆世界が淨土であることが顯はれたのである、法華已前の諸經の說相に順ふて西方に往生を希ふの人々は能く考へねばならぬ、折角十萬億土の遠方へ出掛けて行つても遂に其極樂世界を見出すことは出來ないであらう。

我本師釋尊は每自の悲願に依り、常說法敎化の爲に常に此娑婆世界に在して不斷の敎化を垂れ給ふて曾て自受法樂の爲に寂光土に入り給ふこと無し、玆を以て淨化せられたる娑婆世界を以て本佛常在の國土と爲し本國土と云ふのである、此本國土を或は靈山淨土と云ひ、本時の娑婆と云ひ、同居の淨土と云ひ、常住の淨土と云ひ、事の寂光土と云ひ、莊嚴の淨土と云ふ、其呼稱は異なれりと雖ども、我娑婆世界の淨化せられたるものを指すのである、我等が信仰に於て求むる處は斯る世界である、淨化せられたる娑婆世界である、本佛所居の土に其住居を移し、本佛の御側に於て、不斷の敎化を得んことを希ふのが、我等の最大なる希望である、經に

一心に佛を見奉らんと欲して身命を惜まず、

とは、此希望を說けるものである。

史料

宗門史料

青村　編

周防國岩國長久寺小路　佛住山　長久寺
長門國萩古萩　詔興山　妙蓮寺
筑後國久留米　法榮山　本泰寺
同　柳川　法性山　妙經寺
山城國愛宕郡川東　空中山　寂光寺
遠江國磐田郡見付宿　本立山　玄妙寺
同　濱名郡吉美村　延壽山　妙立寺
駿河國卷原郡松野郷　法王山　妙松寺
丹波國船井郡木崎村　法華山　大乘寺
伊豆國伊東莊葛見　延壽山　妙隆寺
同　田方郡大土肥村　大圓山　妙高寺
同　芦澤郡三島宿　壽榮山　本妙寺
相模國足柄郡小田原宿　青陽山　妙經寺
同　鎌倉郡上飯田村　法華山　本興寺
武藏國橘樹郡神奈川領檜村　長命山　本長寺
同　大豆戸村　大寶山　本乘寺
同　豐島郡淺草田甫　長遠山　慶印寺
同　淺草新寺町　壽量山　妙經寺
同　同　寶妙山　法成寺
同　同　千葉山　安盛寺
同　同　妙光山　圓常寺
同　同　法林山　蓮華寺
同　同　榮珠山　妙顯寺
同　同　長遠山　正法寺
同　在原郡品川宿　鳳凰山　妙國寺
同　同　經王山　本光寺
同　同　惠日山　妙蓮寺
常陸國鹿島郡矢田部村太田新田　惠日山　長照寺
陸奥國會津郡若松甲賀町　寶塔山　妙法寺
同　南部八戸縣　正榮山　本壽寺
同　南部盛岡　上行山　法華寺
越後國頸城郡高田　妙音山　顯本寺

（以下次號）

思想問題

赤化の西伯利より還りて

野口日主

今回私が尼港方面へ參りました目的ともいふべきものは、第一に我が軍隊の慰問、第二には尼港に於きまして我が同胞兄弟七百八十何名が露西亞のバルチザンの爲に虐殺をせられた、其回向を實地の場所に於て、一片の法華經を以てしてやりたいといふ事が一つ、いま一つは今より六百二十幾年前に日蓮聖人の高弟日持上人が靺鞨布教に出たのてあります、それに就ては南樺太ぐらゐ迄は探檢した人がありますが、それから先はどうも事績が分りませぬので、やはり靺鞨人のやうな野蠻人にても殺されたのてあらうといふ言傳へだけ殘つて居ります、この日持上人の事績を一つ調べたいといふ事が一つ、この三つの目的て昨年の九月一日上野を出發して彼地へ向つたのてあります。最初は先づアレキサンドロフスクへ上陸したのてありますが、そのお話は又後日の機會を以て申上ぐることにして、今日は略しまして、愈ゝ問題の中心の尼港へ上陸しました、それが九月の十二日てあります。私も最初尼港といふ所は唯だ寒い所て、山も禿山て、唯だ魚の漁れる河のほとりの漁村てある、漁業の町てあると思ひましたが、實際行つて見ますと割合に別天地てあつたといふ事を聞くのて、又燒跡を見てもさういふ感じがしたのてあります。これはまア善い方から言ふのてありますが、洵に別天地て良い所てある、そうして隨分富裕な所てあつたやうに思はれる、又いろ〳〵の設計もあつたやうてありまして、バルチザンの大本營になつた學校といふのが半分燒けて殘つて居りました。それはバルチザンが大本營にして居つて、さうして日本人を虐殺し、尼港の市街へ石油をかけて燒いて、爆彈てメチャ〳〵に打壞して、自分も遁げながらその大本營を燒いて行つたのてありますが、それが半ば燒け殘つて居りました。その學校を見ますといふと赤煉瓦の立派なものて、中々東京てもあれだけの大なる建物は見ないといふ位に感ずる建物てあります。それを以ても尼港は如何に立派に經營された市街てあつたかといふことは想像せられたのてあります。併しそれも今はバルチザンの爲めにその三千五百戸ばかりの市街の中心の良い所は殘らず燒かれてしまつて、纔に今は端々に殘ない家が殘つて居つて、朝鮮人の乞食のやうな者や、露西亞人の食べられぬ者、それから老人や病人などが殘つて居るやうな始末てあります。尼港は御承知の通り黑龍江の入口から五六里の所にありますが、河は中々廣いのてありまして、黑龍江の河口の所は八浬あるさうてありますから、日本の里程て四里に近い河幅てあります。それから四五里溯つた所てすから、中々河の廣い所に接して居る市街てあります。こちらから船て行つてそこへ着いて見ますと、纔に町外れの方に家が殘つて居るだけて、殘らず全滅の姿てある、さうして風が何となく腥さい、風が腥さいといふような事は詩文章ては讀んて居りましたけれども、どんなのが風が腥いといふのか、私共實際には分らなかつたのてあ

りますが、成程尼港へ船が着いての光景を眺めて居る所へ風がスートと吹いて來て顔に當ると、イヤーな臭がしますので、ハハー成程これが眞に腥さい風かと感じた位てあります。それはその筈てせう、日本人が七百八十名、露西亞人が五千か六千か殆ど數へ切れない程殺された、その他牛馬も共に燒け死んだ、それがその儘になつて居りまして、日本人の遺骨は日本軍などが探し出しましたけれども、まだ全部には手が着けてありませぬ、さういふ位てすから實に何とも言へぬくさい臭ひがしたのてあります。それから未だ當時の火も殘つて居りました、丁度領事館の跡へ行つてお經を上げて、それから近所を歩いて見ましたが、日本の領事館は木造てありましたから奇麗に燒けて居りますが、日本の軍人がその燒跡から遺骨を探して居る、私も何かと思ひまして探しました所が、領事の奥さんか子供の物らしい紋の附いた茶碗の破片がありましたから、是は内地へ歸つて回向をしようと思つて、その茶碗の紋の附いた所を持つて歸つてありますが、その近邊にはまだ煙がプス〳〵上つて居る。五月の出來事に對して九月てありますから、私共行つた時は五ヶ月目てあります、どうしたつてそんな火がある筈はない、けれども二三人と一緒にそこらを歩いて居ると、どうも火らしい、何だらう、幽靈の火ぢやないか、イヤ幽靈ぢやあるまい、本當の火だらう、兎に角掻いて見ようといふのて掻いて見ました所が、全く火がある、併しまだ本當の火かどうか判らぬといふのて、それぢや煙草を吸うて見ようといつて一人が煙草をつけました、私は氣持が惡いから見て居りましたけれども、一人が煙草をつけて吸ひ出したので、私もつけた、所が他の一人が「その煙草をのむとバルチザンがうつるぞ」と言ふ、すると一人が答へて「イヤバルチザンをのんでしまふのだ」といふやうな事を言つて笑ひましたが、實際まだ火が殘つて居る。それは五ヶ月目に火が殘つて居るナンといふのはをかしいと思はれますけれども、何しろ日本の駐屯軍も居るがそこ迄は手が廻りませぬので、片附けもしませぬし、それから露西亞人は大家になると地下室をみな造ります、それから丸太の大きな一抱へもあるやうな丸太を四角に組んて地下室を造りますから、それに火が移れば、水を掛て消さない限りは五ヶ月も六ヶ月もプス〳〵燃えて居るといふ次第てあります。さういふ譯て實に五ヶ月の間當時の現狀その儘て遺つて居つたやうな譯てあります。私共最初行つた時には、市街の外れの方などには、まだ慘たらしい死骸が殘つて居る、身體の方はすつかり爛れてしまつて、毛だけしか分らない、それは日本人か露西亞人か分らぬ位てありますから、毛色て纔にこれは露西亞人、これは日本人といふやうに判別する。それから日本の女て殺された者などは、身體はすつかり砂て埋められて、片足だけニョキリと地面に出て居るといふやうな者がある、それから足袋のこはぜを外して見ると、「おきく」といふやうな名が書いてあります、それは洗濯屋へてもやつた時分のしるしの名前てありませうが、何處の人間とも分らない、唯だ日本の女といふだけの事てある。けれどもさういふ風にしていろ〳〵探しまして、軍人らしい者は軍隊の方て骨にして内地へ送る、それから今度は浦潮斯德から有志團體が行きまして、百七十人かの死體を發掘して之を骨にして、浦潮斯德へ來て回向をするといふ事て、私共一緒の船て百何十人の骨を持つて來た、それはモウ殆ど殘りなく蒐めた譯てあります。さういふやうな譯て實に殘酷な有樣てありました。

さうして彼等バルチザンが斯ういふやうな慘虐無道な事をやつたといふ理由は、いろ〳〵の方面からてはありますけれども、要するに日本軍は國を亡して居つて、露西亞の金持の方の味方をして居る、憎い奴だ、日本軍が見張つて居つては吾々が金持の金

を自由に掠奪することが出來ぬといふので、あゝいふやうな事をやつたのであります。御承知の通りバルチザンは過激思想の一派でありまして、物質主義に立場を成し居るものであります、さうして「今日の金持は貧乏人の金を掠奪したものである、故に之を取返せ、今まで掠奪して居つたのは不都合である、殺してしまへ」といふので、金持を殺してその財産を掠奪して行く、さうして跡を誨ます爲に家屋なども皆な燒いてしまふ、それから若い娘などが居るといふと、「男が一人で美人を占有すべきものではない、女は共有だ」といふので、そのバルチザンの連中が、金持の主人公は金を奪つて殺して置いて、若い女だけは皆連れて行つて共有にする、併し同じ女でもお婆さんや病人などは、そんな者は所謂「働かずんば食はず」だから、これは連れて行くべきものでないといふので、殺してしまつたり、或はその儘抛つて置いて行つてしまふ、日本人が行きましてからも澤山病人や老人を助けてやつたさうであります、まだ今でも殘つて居りますが、彼等はみな日本人は有難いと言つて感謝して居ります。それから日本の小兒の如きは最も慘酷に、石に投つけ、さうして刀で刺し殺すといふやうな譯で、實に内地に居つて新聞等で見たより、彼地へ行つて實地にその慘狀の跡を見ますと、一層の感を起したのであります。それから監獄の跡も行つて見ました、日本人の女の入れられて居つた監獄、軍人や實業家の入れられた監獄、孰れも實に物凄い有樣であります、そこだけは市街の外れにありましたから燒殘りになつて居りましたので、其處でもお經を上げて來たやうな次第でありますが、斯ういふやうに別天地であつた尼港が殆ど全滅されて、日本人が七百八十人、露國人が何千人となく虐殺されたといふやうな事は、是は敢て露國と日本といふ國家の問題ではなくして、彼等の惡い思想の實行がそこに至つたのであります。吾々日本人の眼から致しますれば、さういふやうに軍人を裸にして軍服を掠奪して黑龍江へ落すとか、日本の女を監獄から出して着物をば剝いで、あの寒空に裸にして虐殺して黑龍江へ落すといふやうな事は、實に鬼か蛇のやり方のやうでありますけれども、併し彼等の方から致しますれば、財産家を裸にして殺すといふのは、今までの罪惡者を征伐するのだといふので、却つてそれをやつた者は金鵄勳章でも貰ふといふやうな勢ひになつて居る、實に思想はその根本を謬てば眞に恐るべきものであるといふことを深く感じたのであります。さういふ譯でありますから彼等の方からいへば、いよ〳〵人を虐殺し、いよ〳〵金持の財産を掠奪して來るといふ事が大なる功名手柄で、大將の方からは金鵄勳章に價する奴だといふやうに褒められますから、そこで益々虐殺といふやうな事が行はれた譯であつて、彼等としては虐殺、掠奪が非常な功名といふ譯である。でありますから何處の國でも、その根本の思想が唯だ「金持は貧乏人の富を掠奪したものだ、根抵は物質だ、食べることだ」といふやうな惡思想が實行せられゝば、あゝいふ尼港のやうな有樣にいつてもなる譯であります。今日日本の内地でも色々と「クロポトキンの說が面白い」とか「レニンのやり方が面白い」といふやうな事を宣傳する人も段々殖えて來たさうでありますが、是は上の方も下の方も共に能く考へなければならぬ事で、それでは結局兩倒れであります。若し思想の研究を粗雜にして斯ういふやうな惡思想が蔓つて、是れが實行に移らうものならば、それこそ眞に尼港の二の舞であります。であるから下の方も早計に上に向つて戰ひを挑むやうな事をしてはいかぬし、上の方も亦下を無視し輕蔑するやうな事があつてはいかぬ、上下共にそこに自覺が起らんげれば眞に國家の將來は憂ふべき者があるといふ事は、彼地へ行つても深く内地の事を考へた次第であります

改造運動と信仰（承前）

文學士　武田顯龍

先月號に於て廣義の意味に於ける社會施設の上に改造の必要を說き、又吾等が日常の意識的又は無意識的行爲に對し、道德的批評の法庭に立たば正に改造を宣告せらるべきを述べた私は、進んで思想及び吾等の判斷の行爲の中に改造せねばならぬ點を認める者であります。

凡そ文明の進步には二つの方則があると思ひます、其の方則とは即ち分化と綜合とであつて、此の二者は恰も車の兩輪の如く、其の一にして破壞せられたなら車が動かないと同樣に、分化と綜合との二者の中何れかが等閑に附せられて、一方に偏して進むなら、横に車を押すと同樣、其の文化は偏傾的であつて必ず其所に欠陷を曝露するものであります。社會全體の事柄は皆此の二方面から見なければならない、陸軍の編成を見ましても、軍團あり、其の下に師團あり、師團の下に旅團、更に聯隊小隊分隊戰友と、大より小に、小より細に、細より密に、密より微に分化して進んで居るが、然し中隊小隊の精神は聯隊の精神に綜合せられ、聯隊旅團の精神は師團の精神に綜合せられ、是が更に日本の陸軍精神に綜合せられて居る。即ち初は戰友同志の心掛けより、小隊教練となり、更に中隊教練となり、大隊教練より進んで師團對抗演習を終つて滿期除隊となるのであつて、細より微に分化的に教練して行くが、是が

最後には大演習に依つて綜合統轄せらるるのである。即ち陸軍は分化と綜合の二大方則を完全に運用する事に依つて武士道的精神と、教養に富める眞の强兵の實を擧げつゝあるのである。國家も亦斯の如きもので、農民は農事に、職工は機械工業又は手職に、教育家は教育に、各分化的に進んで各々其の職に忠實に務めても、其が纏まつて國家と云ふものに依つて綜合せられて、始めて其の忠實に務めた實を擧げ得るので、綜合せらるる事なく、自分勝手に自分の職に進んで行つたなら社會は圓滑には治まらない。斯の如く分化と綜合とは文明進步の二大法則で、不可離的のものであるに拘らず、今日論議せらるる多くの思潮の傾向を見るに、或は分化の一面にのみ立て籠つて綜合の方面を忘れて偏傾的となり、或は又綜合の一面のみを見て分化の方面を忘れ、爲に頑迷の淵に沈溺せんとしつゝある狀態であつて、是改造を要する第一點である。

更に現代思潮の病源は唯物論的傾向が量に於て餘りに多く、質に於て餘りに强烈に、總ての思想運動の根源をなして居る事である。唯物論的傾向が病と成つて處生上に表はるる時、之を概括的に云へば理想を忘れて餘りに現實的に流れると云ふ事である。人間が理想を無視して現實的に流るる時は、道德は閑却せられ、宗教は無視せられ、其の結果は本能の奔放に任す事となつて、殺盜掠奪姦婦等有所罪惡は不斷に行はれ、生活は頽唐的に流れて、生氣なく、價値なく、醉生夢死どころか生きて居るのか死んで居るのか解からぬ樣な社會となつて、あはれや現實曝露の悲哀で幕となるか、さもなくば慘虐飽くなきバルチザンの如き者とならざるを得ない。

更に此の唯物論的傾向が教育に表はれては、劃一的形式主義の教育の病弊と成つて人の個性は無視せられ、天才も所を得ずして不遇に泣き、教育の效果は大に減殺せられ、唯徒に平凡の徒と輕薄才子とを

出すに留まつて、社會人類の進歩は大に阻碍せられる事となるのである。樗牛高山博士は百萬の人を失はんも可し、我は一日蓮を得て喜ばんと云つたが、人類進歩の大動機となり、大原因となり、更に指導者と成る者は天才に待つにあらずんば望み得ないが、今の教育方針は斯る天才を化石化せしめんとしつつあるのであつて嘆はしき事である。此の唯物論的傾向が政治に表はれては功利主義の政治、時としては資本主義の政治となるのである。今日行はれ居る立憲政治の根本基調は此の功利主義の立場にある。功利主義なるものは一應は理論として立派に出來てる樣であるが、如何にして最大多數を定め得るかが問題である。又最大幸福と云つた所で、人間の幸福感は時所位に依つて相ひ異るものであり、最大幸福は其の字義上唯だ一つであらねばならぬから、棺を蓋ふ時でなければ何が最大幸福であつたかは判斷し得るものではない。從つて最大多數の最大幸福と云ふが如き功利主義の立場は運用不可能と斷定せざるを得ない。斯の如き空虛な根蔕に立つ立憲政治は勢ひ不徹底に陷らざるを得ない。多數の贊同あるが故にと云ふけれど、其は單に人智の不明の結果齎す一の便宜方法であつて、必しも公正なものではない、何となれば少數が多數を壓迫する事が惡ければ、多數者が少數者を壓迫することも同樣に惡ひのであつて、何れが善か惡か、又は輕重の差如何にと問ふのは、關東のナンダベランメーと、關西のナンジャイウヌと、何れが惡く何れが重きやと問ふのと同じに非ずや、功利主義者以て如何？斯の如き唯物論的傾向に因る物本位の制限選擧制度に對する反動的運動として、人本位の普通選擧制度が所謂インテリゲンチャの間に唱導せらるるに至るのである。然し吾人が此處に考ふべき事は露國の國民自由黨の所謂インテリゲンチャが、大正六年に起した三月革命當時にあつては、彼等は今日の露國即ちレニンとトロツキー等に依つて統治せられ居るソビエット勞農露國をば夢想だもして居らなかつたが、一度自由平等の好餌……結果は惡餌であつたが……を以て煽動するや、遂に群衆心理の趣く所今日に至つたのであつて、尤も中途からしレニン、トロツキーが煽動して今日に至らしめたのではあるが、兎に角今日の結果になつた。普選運動に熱中する人は此の點に留意して頂き度い。更に唯物論的傾向は幾何學的機械觀を伴ひ易い、若し然らば此の傾向が經濟殊に生產方面、機械工業の方面に於ては所謂資本家は勞働者を見るに、人として視ないで商品として視る事に馴れ易く、人格者として視ないで一の機關と視る弊害に陷り易い。是が反動として、從つて前と同一の理法に準じて勞働者は生產に對し、資本の必須缺くべからざる事を否定して、生產は勞働の集積なりと斷定して、天與の恩惠と宇宙貫串の理法を無視して、生產權の獲得を熱叫し、進んではアイ、ダブルユ、ダブルユの如き運動と化し、勞働對資本の爭は白熱化し來つて、遂に一國の安寧を脅し、社會の秩序を破壞し、萬民の幸福を奪ふが如き結果を齎すのである。

唯物的傾向が現實主義に流れ、是が宗教に表はる時は似非似神秘主義と錯綜して、此處に現世の冥福を專らとし、病氣平癒を祈る加持祈禱を專らとする嬉祠迷信となりて人心を惑亂し、甚しきは家庭の安寧を破るが如き徒を輩出するに至るのであつて、市井に多く見る何々教會或は行者と云ふが如き、又は元始天理教及び今日の大本教の如き、皆此の徒輩であり、嘗ては平安朝佛教殊に宮廷佛教は多く此の類であつて、現身成佛を說き、現世冥福に吸々とし、甚しきは畜身を祭りて男女の愛法を祈りたる眞言宗の如きは此の顯著なるもので、遠くば西藏に行はる大歡喜法、又はコンスダンチノーブルの或る教會に行はる處女の誇を神に捧ぐる儀式の如き、皆此の唯物的現實主義より來れる病弊である。此の病

弊は改造すべき第二點である。凡花を見るに是は雄蕊、是は雌蕊、是は花粉、是は花托、是は花瓣だと分析的に唯物的に見るのも一つの見方ではあるが花を見て其の美しさに打たれて、我を忘れて平常の我は花の美の中に投入してしまつて、我が花か、花が我かの境地になり、花一輪に自然の恩惠を感激し、花一輪に佛陀の實在を認め、花の美に己が佛性を啓發するのも花の見方で。

嗚呼〳〵とばかり花の吉野山。

と歎美するも人生である、此の二つの見方が前者が唯物的ならば後者は唯神的である、彼が現實的ならば是は其に對する理想的である、彼が實理的ならば是は其に對する審美的であつて、二者共に我等の經驗であつて、前者は形而下に後者は形而上にの差はあれど、共に人間生活の發露である。此の二つが圓滿なる調和を得て我等の經驗內容を成す時、我等は其所に進歩を認めることが出來る、鎌倉の大路に立ち、大法宣傳に獅子吼遊ばされたる時、暮れ行く空の雲の色に氣附きて庵に歩を急がれた日蓮聖人と、暮れ行く空の雲の色に佛の實在と慈悲とに感激して衆生濟度の勇氣を鼓舞せられ、同時に佛陀と感應道交して時々刻々に成佛の理を味はれた日蓮聖人とは、色も姿も異らぬ同じ日蓮聖人であり、同じ暮れ行く空の雲の色ではなかつたか。唯物と唯神、換言すれば現實と理想、此の二者の圓滿完全の調和に人類の進歩はあるので、眞の文化生活の泉は此處に盡きせぬ源を有つて居るのである。今人此の大調和を無視して徒に唯物的傾向に偏傾するならば、乞ふ見よ鄉等の前に打開せらる舞臺は鬪爭の世界であり、俱相慘害の世界である。唯物的文明の總勘定は過般の世界大戰に於て決濟せられ、不渡りなりし手形は今や露國で決濟しつゝあるではないか。一度拂はれたる手形に對して二重拂ひを進んでせんとする我國民は、問はんと欲す、果して愚か、果して狂か。

佛陀と神明と

王山　松尾鼓城

（一）緒言

法と國、佛と神、これは無論此には法とは日蓮法華、國とは日本國、佛とは久成の本佛、神とは日本の祖神を指すのであるが、この所對の問題は、可なり古き問題になつて居つて、既に幾多調和的な醸合的な巧妙なる議論も發表されて居る。而し其の大部分は遠慮なく批評すれば、徹底したものとは言ひ得ぬ。双方の都合の惡い所は此れを遠慮して、都合の良い所ばかりを持寄りて、體裁を飾つたものに過ぎぬ。私は今その體裁の合はぬ所を突き合はして、これに會通をして見たいと思ふ。マア氣取つて言へば『眞法國冥合論』とでも言ひたいのである。而し病中代筆を受けて居るのであるから、充分なわけには行かない。

（二）最尊本佛に映じたる國と神

日蓮大聖人の我が日本國を稱揚せられたる言葉は、頗る賞賛を究められて居ることは、凡そ日蓮讃仰家のとゝに承知して居ることである。『大日本』の『大』と言はれたとか、『佛法東土の日本より出づ』とか、『日本は一向純圓の機なり』とか、その他、皇室に對する尊敬の辭を拔萃して、只管調國家乃至國家美の眞諦として居る一派の人々の歡喜は最も至極であるが、これは即ち拔萃は拔萃に過ぎぬのであつて、若し聖人の言葉に、これに反面した多くのものが有つたならば、國家主義から日蓮讃仰をして居る人々はヒョッとしたら落膽せぬとも限らぬ。而し隱し立ては永久の策ではない、サラケ出すことは底の底までサラケ出して、而して其の上に眞正の會通を試みて眞の國と法との冥合的結晶點を見出さねばなら

ぬ。聖人の最勝の見地からすれば、三身即一の應身たる釋尊、歴史的釋迦が即教理的釋迦である所の佛陀が絶對最尊の久成本佛であるから、その他に對比すべき神佛があらう筈がない。この上から觀たる日本の神明は小さいものであらねばならぬ。左に二三の例を擧げて見やう。

『日本國の小神天照太神云云』（八幡宮造營の事）

『八幡大菩薩は應神天皇、小國の王なり乃至後國の大王は此國の神に勝れたる事あきらけし』（諫暁八幡鈔）

『天神七代地神五代人皇九十代の神と王とすら猶釋迦佛の所從なり』（給法尼御返事）

『わづかの天照大神正八幡なんどと申すは此國には重んずべけれども梵釋日月四天に對すれば小神ぞかし』（種種御振舞御書）

『今此日本國は釋迦佛の御領也。天照大神八幡大菩薩、神武天皇等の一切の神、國主竝に萬民までも釋迦佛の御所領の内なる上、此佛は我等衆生に三の故御在す大恩の佛也』（彌三郎殿御返事）

『三千餘社の大小の神祇も釋尊の御子息なり』（六郎恒長御消息）

斯く擧げて來ると、日本の國、日本の神祇は一向力なく心細い樣な氣がするであらうが、宇宙界統一主たる一大圓佛を樹立したる見地にある聖人の如上の言葉は止むを得ぬ斷案である。

（三）聖人の本地垂迹論

右の議論は絶待見地から瞰看したるものであるがモ一ッやさしい所で、やさしいと言つた所で出發點はマア同じであるけれども、聖人の本地垂迹論は如上のものよりは柔かに感ぜらるゝ。左にその二三の御言葉を引いて見やう。

『但し日本國は神國なり。此國の習として佛菩薩の垂迹不思議に經論に相似ぬ事も多く侍る』（月水御書）

『天照太神八幡大菩薩も其本地は教主釋尊なり』（日眼女釋迦佛供養事）

『天照太神正八幡宮等は我國の本主なり。迹化の後神と顯れさせ給ふ』（善無畏三藏鈔）

此の類の御言葉は各文章中に散在して居るものが多いから略するが、元來本地垂迹論は行基菩薩の發唱にかゝり、空海これを骨張したもので、聖人も亦時に應じて主張されたものである。

（四）絶對無上尊の日本祖神

如上の第二第三の聖人のお說の儘で日本の神樣に異存が無いならば其れで良いが、若し異存がありとすれば此れは靜聽せねばならぬ。左に日本の神樣の立場を二三拔萃しやう。

『天祖の大神の尊は又は常世の常皇の尊とまうす虛空の極に座し、妙定の限りに立ち』（這は不變常住の宇宙界に常恒に尊立し給ふ大主神座す意味なり。）

『無生始天神』

『靈書の神命は無初無終』（這は何れも無始より無終に至る大本神まうすの意なり）

『一神にして乃至妙座にして而も無處、其の廣さ無限、其の界も無極、之を神虛と云ふ』（這は絶待無上最尊の一神が無邊無際を住處とし身軀として常樂我淨の境地にありとの意なり）

以上は大舊事記の初筆の神（日本書記の神聖に當る）に對する數節に過ぎざるが、此の神を廣張した記事は同卷一二三等に於て筆を盡して讃美しあり。要するに日本國の祖神は大宇宙を身居とし、無始無終の時間に長壽し、絶大の力用と仁慈とを以て立ち給ふと云ふのである。之等に對する文句の引證は前に云ふ如く病中ゆゑ、煩はしければ今回は略す。

記事

統一閣月報

新年宴會

一月五日、例年の通り新年宴會を開いた。今春は聖誕七百年祭と、聖德太子御入滅千三百年忌に當る記念すべき春である。統一閣は昨年の暮に擴築刷新されて一段と莊嚴になり、圖員も逐年その數を增して、同心傳弘の信念いよ〳〵堅〳〵、所謂、天の時、地の利、人の和を得たるところ其盛會は會始まらざるに豫感されたのである。

歲と共に興隆してゆく思想の戰野、敵は多勢にして邪法なか〳〵に熾んなる秋、聖門の和篤共が年頭における第一感慨は當に身經法重、死身弘法、異體同心のそれでなくてはなるまい。

さて當日午後二時半より、聖殿に於て、總裁本多日生猊下を大導師として、僧侶二百餘名、三寶諸尊の來應影響を仰ぎ、恭しく讀經唱題して、正法興立、皇道繁榮を祈念し奉り、それから、美しくしつらはれた大講堂に移つて宴會を開いた。卓をつらねた純信の紳士淑女の面貌には皆一樣に法悅歡喜の色が漲うてゐた。年頭、正法護持の誓願を新にする祝儀の祝盃は、先づ總裁猊下に始つて、つぎ〳〵と廻はされる。屠蘇にも是好良藥の香が高い。

井村總務の同會の辭について、總裁猊下は年頭の所感をのべられる。終つて、昨年末四ケ月をニコライエフスタの道悼を始め滿鮮蒙各地を巡錫せられた野口日主上人の旅行譚が始まつた。(此二講演とも誌上に載せらるべし)

此の外別に珍奇の強しはなかつたが、然し滿堂十二分に法悅の光が輝いて日が傾いた。五時一同起立して殿下の御發聲に和して天皇陛下の萬歲を三唱し、大正七年思想戰の首途を祝して閉會した。

○日曜講演。十二月五日、識の內容、妹尾義郎。生死の巷に立ちて、高木日靖。玄夢日什、井村日誠。十二日、國家論に示されたる處世觀、秋山乾英。明治天皇御聖訓、關田日城。法門可申抄講義本多日生。十九日、所感、泉谷明光。神人合一論。川島松雄。自覺と發心。木村義明。(大正九年講義了)

○附屬夜講、日曜學校。地明會は例の如し

巡回教化

社會部の戰鬪が開始されて以來、天幕と云つぱ雨を連想させられることは、諸君の了知さるゝ所であるが、今迄天幕が如何程の奮鬪をしたかは未だ充分發表しなかつたのである。乞ふ少し〳〵是を記せしめよ。

やゝもすれば吾人は自己の功績を吹聽するに急がはし〳〵、他人の功をば貶み、之を隱し勝なのである。今迄吾人が同人の奮鬪振りのみを書き立てゝ、未だ一回も天幕の功績に及ばなかつたのは實に偏頗の至りであつた、それでも天幕は不平一つ云はず、唯命ぜらるゝまゝに出動して、勇ましき奮戰を試みたのである。名將の功は馬にありとかや、若し同人等に寸功ありと云ふならば、それは天幕の馬物である。然るに今、天幕は大負傷をして居るが、果して吾人に、名將の馬に對するが如き感謝の念情感の情があるであらうか。東洋文明の心髓は慈悲報恩の思想であると云ひ、慈悲高歌に及ぶと云ふ、所が若しそれを傳ふる吾人にして、天幕に對する感謝の念が無かつたならば、これ大なる矛盾であらねばならぬ。天幕あるが故に同人は奮鬪する事も出來、日蓮主義を宣揚する事も出來たのである。

大聖人が立正安國論の中に『先づ國家を祈つて須らく佛法を立つべし』と仰せられたのは、法華經の廣宣流布も論に國家の存亡如何にあるとの御聖訓を拜察する。國家亡びて何處にか宗教ありや、見よルシヤの國情を、先づ國王弑れて國家亡び、然して人民は塗炭の苦みに落ち入つて居るではないか、故に『天の三光に身をあたゝめ、地の五穀に精を養ふこと皆是れ國王の恩也』と仰せられし事が痛切に感ぜらるゝのである。もう一層立ち入つたる日蓮主義の國家觀に於ては、國家亡ぶれば人類も亡び、佛も亡びて了ふ。即ち國土と人身と本佛とは、離るべからざる關係なのである。

かくて天幕を省たならば、それは即ち本國土にも比すべきものであり、其中には人類もあり、本佛も在した譯である。故に天幕が働せされば、本佛の活動もなく、從つて佛國土も現出されぬのである。國友部長が、かつてうど〳〵てらの活動を評して『吾人は到處に佛國土を現出する』と仰せられたが、此の意味であると思ふ。

思へば十一月の末、下谷で大奮鬪を試みた時であつた。雨に遭ふたので、かは〳〵を待つて居ると、或る日のこと、俄かに暴風起つて、あれなる天幕こそ我等の怨敵、紛塵塵に打ち碎けよと許り、吹きに吹きつけた。既に四方の小柱は吹き飛ばされ、飾にありし腰掛はたゝきつけられて、いとも急く見へたが人々かけつけて、漸や〳〵事なきを得た。然し其爲め今は病院に樣はつて居るのである。

あゝ天幕よ、今迄風の朝、雨の夕、艱難を共にし、色々辛い事もあり、苦勞もあつたが、まう僅かで一年にならうとした其間際に、お前はけがをした、あゝどうしてお前を思はずに居られうか、お前の働きは永遠に不滅である。お前が可愛い兒童や、哀れな人達の上に殘した、强い印象は決して消へるものではない。心安らかに養生せよ、お前と苦勞を共にすると云ふたのも、早や過去の事かと思へばわしは涙ぐましくなる。然し又互に手を取づて、奮鬪する時もあるだらう、どうぞそれまではお身體を大切に！

□——十二月十三日本所江東倶樂部、午後六時同會三百名、(同會の辭)、中村藤吉、(思想問題に對する國民の態度)高木日靖(命がけで)國友部長(信仰の權威、成島日衛、餘興講演、桃川蝶花、□——同十五日日本橋、久保田雅巳宅、午後六時同會五十名、(同會の辭)高木日靖、(日蓮主義の心髓)木村日保、餘興講談、桃川蝶花、□——同十七日巢鴨仰高小學校午後六時同會四百名、(同會の辭)藤江甫、(所感)高木日靖(帝國々民の自覺)小原少將(我等は自らに省よ)宮岡中將、餘興琵琶講談、桃川蝶花。(松雄記)

自慶會支部月報

○十二月一日、名古屋市豐田織布菊井工場、女工二百名。「誠心の目醒むる時」國友文學士。「立身行道の心掛け」山內先生○同日、豐田織布押切工場、女工二百名。「感恩の生活」本多猊下。「眞の價値」國友文學士○同二日、豐田紡織本社、社員及男工五百名。「教育勅語の

聖旨」本多稅下。「日本國民と日蓮主義」山內先生○同三日、菊井紡織、女工七百名。「人の一生」本多稅下。「墮落か向上か」國友文學士○同日、日本車輛、木工六百名。「教育勅語の聖旨」本多稅下○同四日、機器製造所、五百名。「教育勅語の聖旨」本多稅下、○同日山陰製材、三百五十名。「感謝の生活」本多稅下○同五日、豐田織機、六百名。「教育勅語の聖旨」本多稅下○十一月二十四日、明石市公會堂に於て、聽衆六百名。「時局の倫理觀」藤井文學博士○十二月十日、神戸市神戸製鋼所、千五百名。「教育勅語に就て」本多稅下○同十一日、同所、千五百名。「教育勅語に就て」本多稅下

廣島地方復活戰

今を去る十三年の昔、本宗西部講習會を廣島市に開催し、本多稅裁稅下を初め、宗門の龍虎相集りて、內に專門の教義講習は勿論、外に盛に教戰を張りて安藝門徒に鍛鍊を加へしより既に一と昔半、法運再び巡り來りて茲に本多稅下を中心に、一大布教は開催せられたり。即ち十一月九、十、十一の三日間、廣島市本願寺に於て開基日榮上人の三百年忌大法要を修し、及び岡山の能仁、九州の中原、明石の川崎師等走せ參じて大法輪を轉ず。

△九日午後二時、本願寺に於て「道を尊重せよ」中原特命布教師△同日夜七時、同寺。「道を尊重せよ」中原特命布教師。△十日午後二時、同寺、「本佛の實在」安田臺城師「日蓮主義の信仰」能仁事一僧正。△同日午後六時、廣島市公會堂に於て大講演會、聽衆千五百名

民心の善導　中原特命布教師

犧牲的精神　鈴木海軍大佐

國民思想の基調　能仁事一僧正

重要問題と日蓮主義　本多大僧正稅下

△同日午後二時、呉市日本館劇場に於て

現代思想と國民の自覺　川崎布教師

重要問題と日蓮主義　本多大僧正稅下

朝鮮釜山天晴地明會

朝鮮釜山にては赤化の西伯利を視察し來れる野口日主僧正の歸途を風請して數回の講演會を開催せり。

△十二月九日、釜山商工倶樂部に於て、聽衆二百六十。

所謂改造問題の決　横山惠正師

赤化の露領を見て日蓮主義に及ぶ　野口日主師

△同十日、釜山高等女學校、聽衆四百名

日蓮主義の修養と實行　野口日主師

△同日夜、釜山商工倶樂部聽衆三百二十名

日蓮上人人格の多方面　横山惠正師

文明改造の評準　野口日主師

△同十一日、釜山教育會主催、釜山第一小學校に於て、聽衆百三十名。

國民皆菩薩主義　野口日主師

△同日夜、天晴地明會々場、聽衆七十六名。

惑座と法華經の藝術　野口日主師

統一閣支部月報

◎名古屋支部。一月十五日午後六時名古屋市堂藤寺に於て日蓮主義講演會開催、聽衆一千名。

改造と日蓮主義　野澤陸軍少將

帝國の興廢は法華經の信否如何にあり　山內櫻溪先生

◎豐橋分團。十二月十三日、豐橋市立高等女學校に於て、「新文明に對する婦人の使命」野澤少將。△同日、妙圓寺に於て、「思想問題の踏結」野澤少將。△同十四日、渥美郡泉村江比間小學校に於て「皇國の危機」加藤少將「思想問題大觀」野澤少將△同日、同村青年倶樂部に於て、「復興に就て」加藤少將、「改造の要諦」野澤少將△十五日、田原町會議事堂に於て、「持日に對する國民の覺悟」加藤少將。「思想問題解決の方針」野澤少將△同日七時、同町常行寺、「思想問題大觀」加藤少將。「模範的文明の建設」野澤少將△同十六日、白須賀町妙泰寺、「思想淨練の標準」野澤少將△同夜妙泰寺、「弟別と平等」滿井文學士「思想問題の踏結」野澤少將△同十七日、白須賀小學校、「生活の三方式」野澤少將△同十九日、濱名湖畔三ケ日廣場、「東洋文明の擔荷」松本梁晴師。「皇國の危機」加藤少將△同二十日、三ケ日小學校、「國民の使命」加藤少將。

◎四日市分團　一月十五日安樂寺講堂（四日本堂）約四十坪の工事豫定の如く進行し、國友文學士導師の下に盛大なる上棟式を催す、各地よりの祝電祝詞は山の如く、又新に本州中部の要港に建設せられたる、日蓮主義宣傳の道場の前途を祝ぐべく遠近より來集せる信男信女は雲の如く、かくて會衆一同法悅歡喜の裡に芽出度式典は挙げられたり。

◎淀戸町開教　淘器を以て聞えたる東尾淀戸町にも中京思想戰の影響は透徹し、熱心なる同志蜂出するあり、かくて一月十八日同町寫業學校長思田正義氏を中堅に、日蓮主義宣傳の第一聲を同地陳列館樓上に擧げ、會衆滿堂。

我とは何ぞや　山內先生

思想問題の踏結　野澤少將

府馬教信

◎千葉縣香取郡府馬村は全村六百有餘の戶數あり、數年前より村治の基礎は村民の健全なる思想にありとし、これが善導の第一義として、戶主及び婦人青年を一丸として會員とし、會名を修養會と名け、時々講演會を開催してその功果を收めつゝありしが、十二月十九日同地修德院に於て左の講演會を開催せり

我國教育の淵源　伊藤中佐

三統包貫と國民教化　藤川督正

更に婦人のために

佛典に現れたる女子の心得　伊藤中佐

我國女子の美點　藤川督正

大牟田天晴會野外傳道

大牟田天晴會は十二月十九日午後五時大牟田を發し、三池郡淀瀬に至り、同地日蓮主義鐵修會の主催たる野外講演に臨みたり。驛前に迎えたる鐵修會々員と一團となり、尚海常任講師を先頭に列をなし、道々題目を高唱し、町内各所に群衆を集め、會員壯士七名交々起ちて國難來を叫び、國民思想の頽廢を歎じ、外來思潮の危險を激し國家觀念を鼓吹し、信仰生活の悲潮を落唱し聽衆に多大の感動を與え盛大裡に午後十一時大牟田に引揚たり。

本多日生猊下著書一覽

書名	價格
○法華經の心髓	金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步	金七拾錢
○日蓮主義	金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義	金壹圓五拾錢
○國民道德と日蓮主義	金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳	金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要	金貳圓貳拾錢
○日蓮聖人の感激	金貳圓貳拾錢
○日蓮主義の運用	金貳圓五拾錢
○東洋文明の權威	金壹圓八拾錢
○國民教化	金貳圓貳拾錢
○法幢	金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶	金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經	金貳圓
○聖訓要義	卷一、二、三、四、五、卷六、壹部金參圓 壹部金貳圓八拾錢
○開目抄詳解	上卷一部金貳圓
○聖語錄	金貳圓貳拾錢
○優婆塞戒經通解	金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解	金八拾五錢

以上各送料一部金八錢

書名	價格
○法華經講義	上卷下卷各一部金參圓四拾錢 送料一部金四拾錢
○大藏經要義	一部金參圓四拾錢 送料一部金十八錢 半年前金送料不要 一卷既刊
○法華經要文	上製金五拾錢 並製金參拾錢 送料一部金貳錢

○思想の惡化善化

○人類文明の基礎

○正しき理解と信念

○日經上人の功動

（各一部金六錢百部以上金五錢の割 送料一部金貳錢）

一部金十錢郵稅金五厘

以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし

東京市外品川町妙國寺內

大藏經要義刊行會

振替東京三一五九六番

統一定價		廣告料		
一冊	一ケ年	一頁	半頁	四分ノ一頁
金參拾錢	金參圓參拾錢	金拾圓	金六圓	金參圓半
送料一錢	送料共	前金の事		

大正十年一月廿九日印刷納本
大正十年二月一日發行（第三百十二號）

不許複製

編輯人　國友日斌　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行人
印刷人　鈴木日雄　東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

發行所　統一發行所　振替東京五一〇七一番
編輯所　統一編輯所　名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常德寺內

日蓮主義宣傳活動寫眞株式會社株式募集

募集要項

▲資本金總額　金拾萬圓

▲總株數　貳千株（內六百九拾三ハ發起人賛成人引受濟）

▲募集株數　壹千三百〇七株

▲申込株數限度　壹人ニ付壹株以上百株マデ

▲申込證據金　壹株ニ付金五圓（株數申込ノ際拂込ミノコト）

▲申込期間　大正十年二月一日ヨリ二月二十三日限リ

▲第一回拂込金　壹株ニ付金貳拾五圓（申込證據金併算）

▲同上拂込期日　大正十年三月八日

▲募入方法　應募株數過不足ノ場合ハ發起人ニ於テ適宜決定ス

▲ハガキニテ御申越次第書類一切郵送ス

國有利多益確實無比詳細ハ目論見書ニアリ

發起人及贊成人

（引受株數決定ノ分）

[illegible]

（紙面都合上以下略）

▲目論見書ノ請求、株式ノ申込、申込證據金ノ拂込、第壹回拂込金ノ拂込等ハ左記兩所ノ内何レニテモ御都合宜敷方ヘ願上候

京都市下京區五條大橋東二丁目　株式會社村井銀行五條支店

京都府紀伊郡深草村直違橋九丁目百七拾四番地　日蓮主義宣傳活動寫眞株式會社創立事務所　電話伏見七〇四番　振替大阪一二五一九番

▲株式申込期日切迫ス至急目論見書御請求ノ上御一覽ヲ乞フ

臨時號

日蓮聖人降誕七百年